



增補  
改正

俳諧歲時記原草

5  
678  
1







増補改正

儀禮

采時記

采州 全五冊

法苑珠林

三書堂梓

割  
門  
第 678  
卷 1

明治 十一年 日

坪内祐藏氏寄贈

俳諧歳時記采草序

俳諧草小行るよりして活

法の書もまたこゝろの守

名の中ふも曲亭主人

に編る采時記、神祭佛

事、公のりをばかちりふ

注した社をうひまの階

棟とふりあつたにを

社、この色紙をよむと母





左よりふを流とてその本島  
穀まゝに其餘の註釋全  
うらゆるその多くして  
時小陰みまゝとるものあ  
りぬ一しとおのれいとも何留  
おく其是らぬを補む  
志ありきをけしき誤り  
をさふ一し所を詞の類字  
をとりて部をわくら歳

時記葉草と名張たか  
せく坐右最愛能物  
と一そておむるま  
葉及葉の何る一いつた  
見は巻ていよくはむい  
そいとわやまを流し  
師のようや博識能そ  
志やまをハ穰とと毛櫻  
本小ちりも免形むす



むつ田に院乃事このく  
 六の色を中するもの  
 ありそに良森やと志  
 貴王にこひくや百はせ  
 波あれ予の隠むよあへ  
 夫つてひふこそ何きへ  
 中く小山を井乃心よま  
 るく妹ならそいし

嘉永三年 藍亭  
 成業月 青藍

凡例

○世に俳諧詞寄の書ありしとども註釋全うらざる  
 故に初学の人時か臨んで惑ふ者あり故に曲亭  
 馬琴翁先づこれを俳諧歳時記に於て  
 増補となりてこれを見安からん爲に四季の詞の  
 頭字といふは四十七字の部とわくち註釈と  
 ともに席上の便りとして

○かう かう かう かう かう かう かう かう かう かう  
ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう  
 うひを正しく悉く部とくつ時か却て初学の惑  
 ひとあはれざるをば其声の索もまじり部  
 を併せ出さるるをかうの類にこの部  
 あてせかの部とてかの部かの部かの部  
 の部とてかの部又かの部かの部かの部  
 部を併せ出さるるを余はかの部とて

○漢文と俳諧の書あはせるは専ら初学の人  
 へのことなりしが爲にかの部とて本文の註















を口ハ珍の菓有とつりぬとて一歌乃飲  
 の樂とぬの心入る世上の變とありて笑言  
 不耳と遊むむむ俳諧自在の人といふべし  
 俳諧のそとありまをきまうく俳諧  
 不遊ふ時ハ産と破る業と怠るといふ故  
 逸のうき名とまうく世法の一助  
 るべし

俳諧の大意

增補俳諧歳時記草

春之部 曲亭主人纂輔  
 藍亭青藍増補



漢書律曆志少陽者東方東動也陽  
 氣動物於時為春春蠢也物蠢生西

動運日行東 太皞 帝禮月令註太皞  
 陸謂之春 伏義木德之君句  
 芒少皞氏子曰重木官之聖神繼天立極

生有功德於民故後王於春祀之四時之  
 帝與神皆此 神有令其帝太皞

義下效之 句芒 其神句芒也

蒼君天 春の天と云 教名氣 東君 祀郊

記晋巫 青陽 爾雅春 韶光 漢律  
 祠東君 為青陽 曆志

景曰媚景韶景韶美也  
 春の景色のうきとあり

正月 夏ハ寅と以正月とす人正と云高六丑  
 と以正月とす地正と云周八子と以正

春











惜月

同上 扱ありぬ月とともなりとわき後  
くはゆくころのまどり四月 家隆

正月

院拜禮

元日 天府記 延文五年正  
月一日 辛巳 院拜禮 午

刻諸卿以下 参集次 無畫御座 庇御簾 間次御  
出 直御装 次 関白前 太政大臣 右大臣 并 大納言  
中納言 参議 以上 一列 庭中 次 殿上 四位 以下  
別當判官代等 一列 拜舞了 之後 従上 鷹次第  
退

嚴島祭

下支地の御前 藝列 安藝郡より 身を  
嚴島と 同体 毎年 正月 下の 亥日

お神祭より 近国より 乗舟 参詣す 祭正月 下の 亥日

より 二月初の申日 迄十日の間 祝師 嚴島の上 卿齋所へ入る  
潔齋す 国府の奉幣使 社家本 未日 嚴島へ  
渡海す 夜半 至る 七度半の使わり 道芝記

夷祭 十日 摂州西の宮太神宮の祭に 村民九日の朝より 夜  
に至り 戸を開て 出ず 身を 居籠ると 一説に

女神前より 男の家へ 居ると 一説に 雍列府志より 居籠  
祭 正月初の申日より 四日の間 柞の森より 申日より 亥日に

至り 神事畢る 傳を以 問惡鬼 遊行す 其ふあまの世より  
あり 故小兒女及六畜と 他村より 男子 家より 門戸開  
闔の音と 禁声と 揚す 民間 居籠ると 亥日 旅所 小神  
事あり 社司 斥帚と 以て 口鼻と 覆へ 人氣と 神典 触  
糸 神と 持て 役行す 又 五穀の 雜種と 各一器 盛り 又 農具  
と 村民 携へ 供奉す 神典 旅所 小通り 後 諸民 大いこ  
こよと 呼ぶ 是 居籠の 号 欽 攝陽 群談 毎年 正月  
九日 蛭兒 尊 廣田の 社 臨幸 あり 神の 容相 異と 以て 人倫 見  
ん 恥と する 諺と あり 村民 戸を開て 外へ 出ず 門松と  
逆ふ 居籠ると 明且 諸家 各戸を開て 参詣す 世俗 十  
日 夷と 呼ぶ 諸家 十日 小参詣 すると 十日 夷と 呼ぶ 神ハ 籠  
く まり 参詣す 恭 諸の 入 社の 後の 羽目 板と 敲く 街と 米  
花袋 蜈蚣 小判 赤い 豆と ぬぐい 物と 賣る 下向の 人こま ことか  
ひ 笠の 結つけ 又 賣る 処の 烏帽子 と 買ひ 頭を 戴き  
往來の人と 笑ひ せ 與す 〇 商家 廿日 大 小 宴と 設  
け 客と むす 饗應す 江戸 中へ 八の 月 廿日 夷祭と 参す  
寝積 寝擧 寝と 稻と 和訓 同し 故 祝詞と  
す 積も 擧も 又 稻の 縁語

春



雜詩抄ニ寝卧と常のてく唱ふるハ病床と云ふ事あり

みまの部画鶏ノ帖 芋頭 羊がらと頭と 唱ふる例の祝

語ニ玄蕃頭本頭と云ふ事あり 磯上米摘 重

垣磯辺の凝かふる 字彙云凝氷堅也〇とけし氷 再び結ぶる意あり

飯餡 和漢三才圖會ニ云状九五六寸あり 其頭鳥の卵のごとく頭中ノ白肉と云

煮て食ハ其肉粒と云ふ 飯のあつ故小飯餡と名く 正月ささりふ出ス播州高砂の産飯多

兼三春物遊糸 莊子逍遙篇云野馬塵埃也生 物以息吹者也希逸註云野馬

遊糸也水氣也〇杜詩落花遊糸白日靜 紙 〇かげろふ糸遊一物と云ふ糸遊ハ異名也契沖雜記

紙老鴟風巾と云ふ同ト漢高祖陳豨と征す 時未央宮の遠近と量る為小韓信造ると云

続博物志云今紙為糸と引て上る小兒と云く口と 張ると仰と視せしめ小兒の内熱と云ふ事せんが

為ハ本邦ふかつて亦小兒さん小児ふかつて益を 其ふあふハ俳諧歳時記云鳥賊幟と名づけらるる

鳥賊のさや其形の鳥賊に似しもの名と云ふハ 江戸の俗章魚と云ハ鳥賊に對しての名ハ伊豆ノ三

河辺の間ハ五月止る 二月 虎杖 蕪頰岳經 虎 其製三河尤巧

蕪如竹箒杖上有赤斑點初生分枝子葉似小 本葉七月開花九月結實〇時珍曰杖言其莖

虎言其斑 和名抄 虎杖 枕草子 其のつととせしめしもの〇又これを

其とせしめしもの〇又これを 後拾遺集ハ三月ヅリハ草と云ふ侍る

藤原義孝君ハ此花ハ月のまゝの草と云ふ侍る 童蒙抄ハ雲御抄

大和本草 樹彼岸 系櫻 櫻と同一枝長く糸







枝と折て... 箱荷

の御出 雍州府志云... 箱荷の御出

氏子供奉... 御旅の間四月第二の卯日

池上千部 長栄山本門寺... 池上千部

伊勢櫻 此花緋櫻の種... 伊勢櫻

家櫻 李吟曰... 家櫻

一歳桃 實と種く當年花... 一歳桃

三月爐塞 元日公事根源... 三月爐塞

正月六の餅六入 ヤ部敷... 正月六の餅六入

正月腹赤奏 元日公事根源... 正月腹赤奏

炸燧の冬十月より寒... 炸燧

三月至る暖氣... 三月

全不供... 腹赤の食糧

其後四十五代聖武天皇... 其後四十五代聖武天皇

と奉る是... 年毎の節會

春 ろは

六







世諺問答

秋のころ蜻蛉を虫出さず蚊とくわすものいふこと  
とま木蓮子さくころんぶらぶらあやうき花つけり  
板さくあぶらばつたつ時んぶらぶら  
のやうきさく蚊とくわすれまけんがたのし  
初高 初賣

賣初 注釈ふ 初子日 子日遊 子日松扶  
買初 及ぶす 初子日 小松引

略記 宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴行幸北野雲  
林院 菅家文章子亦嘗聞子故老曰上陽子日遊歌老又曰

倚松根以摩腰習風指之難犯也拾芥抄正月子日岳登  
るは何ぞや傳云正月子日岳登る遠く四方と望陰陽の  
静氣と得煩悩と除 初子のくふの玉笠帝

初子乃今日乃玉笠手余取如良尔動具玉乃  
緒家持袖中挑玉笠と替と云章小子日の小松と引  
ぐて幕小作と田家正月子日小

蚤飼する家と掃初るをみる 初寅 紀事 正月初  
寅の日師々山

鞍馬寺の諸づ是と初寅と云此日鞍馬の土氏福等木と  
以て鑰と作て是と賣るれと福搔と云福徳と云はとも  
のいし又生蜈蚣と賣是と袖福蜈蚣と云多門天の使令  
と云と云の九と鞍馬山中雞と養ふりふんハ鶏好ハ  
蜈蚣と食 初卯 正月初卯日攝州住吉の社詣見  
ふ故るす 初卯と云社内ふらりて神符と  
泰詣の諸人小授く是と卯の札と云江戸ふらりて此日本  
の妙美へ泰詣す今日受る処の紙符と申す押諸人は是  
と頭ふさ 萬春樂 春鶯轉 梅 岷江  
て家帰る 青柳 大芥 入楚

萬春樂ハ踏哥の曲云萬春樂ハとて八句の詩云と漢音  
ふらりて句毎のあひひ方春樂と唱とて踏哥の舞人の立と  
まふらりてと 體源抄 春鶯轉 合音の作者照子山右大略樂  
器とてつら樂の作者一説ハ天長室樹樂と云くこれ踏哥  
の曲云梅枝 梁塵秘抄 目之部ふらりて枝ふらりてさるやせもの  
けとこれ 春鶯轉 春鶯轉 春鶯轉 春鶯轉 春鶯轉

こころや雪ハふらりて 青柳 同抄 律之部ふらりてやせもの  
とふらりておけや鶯の 鶯のふらりておけや梅の花







光背甚白く、鏡の如き齒云木肌  
細く白く、性堅く直く、梁拱とて撓曲せず  
か部霞の  
春のゆび

春ふあひや  
春ふ逢んと云詞に入来る  
春と云ふはこころをさすや  
春

伊勢物語 月やあふる春や昔のまゝ  
あふるあふるあふるあふるあふるあふる  
春ちり

藤文が春ちりともことらるるハワハ、青蓋掛さるるハ、  
身うちとちりあふる人の春あふる春とちりあふるあふるあふる

春まけて  
春かまけて、春まけてハ春と  
設まつて春まけてハ春と兼設

万葉春まけてハ、秋風ふとちりあふる山と  
けり

花の時  
三月 初午  
二月上の午日と云 神社啓蒙  
まけぬ丸  
稻荷のハ山城国紀伊郡豊後

京城と去ると東南一里あり、祭とちりあふるの神三座、下社ハ大山  
祇中社ハ倉稻魂上社ハ土祖神云、元正帝の御宇、当社影

向の日偶、二月初午日故、今亦至て此日と用ふ 神祇拾遺 雍  
州府志 當社の出現ハ和銅四年二月九日、此説ハ後ハ長曆と

以てとせむと推すと云、其日偶初午の日も當る、然れども今九日  
と用ふ事、初午と用ふ故、俗初午詣と云、又福袋と云 紀

事、此日新御供、社家毛利氏調進す、中の社ハ倉稻魂と祭り、  
田中の社ハ大己貴命と云、本朝衣食の祖神す、若生

安逸の社、今日農民恭詣と云多し、門前の家ハ百穀の  
種并雜菜の種と賣る、又大小の陶器と賣る、その大なるもの

とハ薄法と云、其ころハ摂州薄法の海濱とて始てこれと製  
す故ハ薄法焼と云、是ハ其小なるものつねと云、此品ハ手

の中に運轉させ、ハツツの音を、故ハ音とす、此品ハ小  
児と賺し、大人も塩と此内み入て火中ハ投し焼塩とす、

今日民家多く菜の葉と食ふ、凡恭詣の人、神前ハ投ま  
ぬの錢と云、簾の間ハ、このおき、その人福と云、

遺集の滝の水、ハ、山七日の水と云、此品ハ手  
思ひ、武江と云、此日王子妻恋三間真崎の社と始に、

武家市中と鎮守の稻荷と祀、灯燭とハ、鼓吹と云、  
舞ハ、近くハ雲間の霹靂如く、遠くハ蒼海の

波濤に似たり、江戸の賑ひ耳目と驚き、堪たす  
初雷

春  
は



初電

月令仲春之月雷乃發始電

蜂

同巢

蜂數品を蜜峰とす大黃ト竹ト赤翅ト蟻蟻

物とせんが為自然小脾と結び貯るると山蜜と云熊野小

所諸国ふあり紀州熊野と第一とい

歴るの鹿多子と産こと往くこと

花初櫻

花ハ端山より奥山に至り紅葉ハ奥

もこ鳥

の条ト注ス

花と待

初学和哥式花咲そめてらんらんをむむと

三月巴字盛

の條ト注ス

花鎮祭

晦日公事根源是ハ大神狹井の二祭と云

蛤

の浦の邊

花

横川曰櫻の我國に於て今と云ふと

花盛

花譜吉野山の櫻と立春六十

春は



温... 陸放

彭牡丹記 半晴半陰謂 花錦 朗詠詩 織自何

之花曇養花天同之 越様仕春風花飛如錦幾濃粧 花

雲 古今序 白雲の色の千種...

花雪 猶ハるゆる花の... 花滝

稀傘 花の滝... 花浪

花浪 花の波... 花笑

花笑 又花の... 花顔花

花の顔花 花の姿... 花唇

花唇 朗詠 誰謂花不... 花輪

花輪 字彙 葩... 花心

花心 心の花... 源氏物語

源氏物語 寄本...

春 は

花の宿、花の窓、花の扉、花

花の姿、花の肌、花の粧

花の鈴 護花鈴

花の顔花

花唇

花輪

花心

源氏物語 寄本



花びられまする名もま御傘人の花衣花の衣花

の袖、花の袂枝折萩花の袖、うろつき袖、花はるる

花籠、花籠和漢

御傘正花、植物、春三才番金竹器無係為篋有係為藍下略和名抄篋美

花皿佛家て

花活、花入、花筒、花瓶この

花車、花見車開元遺事揚国忠

花笠、花蔓、花の盃増山井

花の散花の散

花空穂貞徳翁の

花の隨身年浪草大臣家の賜

花造年浪草花肆

花むすぶ又造花肆類

花宴類聚国史弘仁二

花軍天宝遺事長

花安春時遊賞

花勝、千金と用く名花と市、庭、植、以て春時の

花備、月令廣義、緑草鋪、細落花為禱、

春は



花の繪 御傘 正花に持し、植物あり春

の都 秋名 国城と都とハ國君の居る所人の都會す

花とやん 法華經序品是時天曼多羅華摩訶曼珠沙華

花の 御傘 法華經の四種の花とやん何と云れ春

踊 御傘 花とやん盆の踊と云りとも花見と云りとも

花の縁 一説は花の淵の 風静花芳と云る題

花香 御傘 花とやん春

花鳥 花と鳥と二ツと云りハ鳥の字清く訓

散る 飛花 天水秋 花のおつる体ハ山里深山人倫と

落花 絶くも人も掃る所花おつると

花の主 花のありし 花守 皆人

花園 花と種 花と種

花圃 花と草と種と云故 貞草式

花嫁 其女の夫に歸し 男の

花婿 女とむらうとも月

花の幕 日のつゝもあはれと花嫁のひ花單

花の山 花ある山と花山との文字

花の雨 花のありし 馬 蕪 葉 薙

三月紫碧の花 五月実と結び角子と云す 麻の

春は











みと亦星と祭るこの九曜の次象羅土水金日火計月  
木と一歳と九歳とふくむと十歳と十八歳と  
いくと九と九年目とふくむと

### 蓬萊飾

紀事倭俗新年三方葦の海老鬚斗見布襪橙穂儀  
ホと置先賀客供新年と祝ふ是と蓬萊臺と

云列子渤海東有山一日岱輿二曰員嶠三曰  
方壺四曰瀛州五曰蓬萊華實皆有滋味食之

### 穂俵

莫鳴菜不  
朝式奈里

曾袖馬藻漢語抄奈乃里曾和漢三才帝西南の海  
小多し冬身を取乾し藁押はし一握り

### 穂長

志部の  
函袋の

穂儀と名づく正月蓬萊臺の飾  
條小 雑談抄餅の異名と福生果と云  
出す 故餅と福と云(福引と云

### 爆竹

さ部左  
長の条に出

### 宝引

餅と二人を引あつて侍を云  
福引宝引をふくむと云

### 骨正月

京大坂より新年の嘉祝ふぶし餅の脯と  
用ふ其魚の骨小大豆酒の糟と入ま煮熟

### 堀入

の部野大  
根の条出

### 兼三春

### 物波蔭菜

時珍曰四月莖と起一尺ばかりあり  
雌雄あり莖と就く碎紅花といふ

### 防風

和漢  
三才

### 二月

### 本妙寺詣

初午日〇江州三上山の辺小田跡あり  
今も二月初午詣あり此本妙寺山門

亡滅の時江州辺の末寺を共小回祿す又其寺  
さぶ相傳ふ近江国野濱郡百足山本明寺本尊馬頭  
観音今旧跡三上山中のみ堂宇僅ふ二間四面里俗の説  
小本尊は依秀郷守り本尊とし御長一尺あり毎年二  
月初午開帳を鯉口の銘ふ百足山本明寺とあり其麓の

春  
ほ



五林三上明神の社を是と以て思ふ、本明寺観音  
 三上明神の本地佛あり、堂の前、三拾三間の夫  
 場あり、初午日、今に至る、矢在嚴、一里民、一夫  
 と高ふ参詣の人を、買て奉納す、本尊平日ハ秘  
 仏あり、初午日或ハ三十三年と開帳の期とす、當日初  
 午の外ハ北、こゝろ南、さう村の百姓四十人、講を  
 結び、一村より六人づゝ各十二人と年頭、一万事と  
 支配す、本尊南村あり、時ハ北村より封と付、北村  
 不在す、ハ南村より封と付、互に尊敬の意を  
 示す、初午日、節分の豆と十二銅と捧て、諸人  
 祈願す

**三月 木瓜花**  
 和漢三才圖世木瓜と称す、この本草の註あり、  
 是本桃、木瓜あり、近頃唐木瓜と云ふものあり、  
 入其花と愛す、乃ち真の木瓜、蘇頌、孟詵、木瓜ハ赤  
 の如し、春の末花、花葉山中多く生す、  
 とむく深紅色、**春蘭花** 一根叢生す、葉長一  
 二尺、冬と歷く凋、形短、芒小似、厚くこぼく  
 綠色、冬中箭と発し、数華苞をふす、紅白色、三

月、至る、幹の長さ、数寸、梢、小當つ、花苞中より出  
 る、花、一花五出、青黄色、形、建、蘭花に似、  
 や、闊し、香氣あり、此、**郭公の巢** 和漢三才圖世  
 物蘭譜より出、独頭花、杜鵑、巢、  
 杜鵑、蜀王、望帝、所、化、也、至今、寄、巢、生于、百、鳥、  
 巢、其、離、尚、  
 如、君、臣、

**二月 蛇蛻地虫の類穴と**  
 出、  
 月、令、仲、春、之、月、蟄、虫、咸、動、故、也、  
 始、出、注、謂、始、穿、其、穴、而、出、也、  
 正

**月 歳徳神** 元方、棚、紀、事、陰、陽、家、来、年、の、支、干、  
 小、因、四、方、の、間、吉、兆、と、考、  
 こ、し、と、得、方、と、稱、す、**蕭、簋、内、傳、年、徳、神、ハ、**  
 顔、利、女、ハ、い、ゆ、八、将、神、の、母、と、云、  
**桃符、桃**

**板、桃、梗** 仙、木、神、茶、**淮南子**、**桃、格、一、死、す、詩**  
 慎、注、云、**格、ハ、大、枝、ハ、桃、と、以**  
 て、こ、し、と、つ、く、以、て、**界、と、し、ら、殺、す、こ、し、と、以、て、来、鬼**  
 桃、と、畏、ら、今、人、桃、梗、と、以、て、**杖、と、作、り、歳、旦、ハ、門、を、植、**

春 へ と



鬼と辟ふるれりとの故に六帖元日桃符と造り戸  
 小着くこきと仙木と云百鬼の所畏に風俗通東  
 海度朔山に桃樹を屈盤して三千里其早枝東北ふ  
 ひふ鬼門と云二神あり神荼鬱壘と云衆鬼出入執  
 以て虎を飼ふてつらういふ黄帝法に膏藥三日  
 此の象を桃板と門戸の上と云の  
 主上千瘡膏と膏藥と進るに後醍醐天皇御額并  
 耳の裏へ傳ふに江次第に主上取之右の無名指と以て  
 左の掌ふめりめりめりめり注ふ右の赤四の指と曲るは  
 是大師の印相と云一名千瘡万病膏と云かやりの  
 名と思へ  
 屠蘇 供ずの条に出 年男 紀事云 若水と  
 名と思へ  
 汲むと年 鳥追 雍州府志七巧の元日よと十  
 男とりふ 五日小至と笠と着白巾と以て  
 面と覆ひ手とて祝語と云へ門ふりて米  
 錢と云ふ是と歌の与次郎と号す又鳥追と称す  
 とて民間田疇の鳥と追ひては辞と云ふもの○  
 今東都にて俗に女木夫と唱ふるもの編笠と着三

結と云ふは 年玉 新年の賜と云う 東叡山  
 年玉と云ふは 大黒の湯 三日武江東叡山中護国院に大黒天あり正  
 月三日餅と湯と云ふ 泰詣の人ふ撃つむ  
 こきと大黒湯と云ふは 必所願成就を  
 とて此日諸人泰詣す或は福の湯と云ふ  
 こ部左義 宿直人 真言院御修 泊山 多部の鳴  
 長の条に云 法の条に出す 鳥狩の条  
 鳥 書竟典 仲春 氏  
 折る鳥 歎 終年  
 十のこの花  
 昔家筑紫へ左遷の時梅と詠つる  
 哥に東風ふら白ひらき梅の花あ  
 るに 春と云ふは 於て  
 梅飛ゆと云ふ 謫所の庭に生す  
 とめこのの梅  
 新古今とめこの梅と云ふは 我宿と  
 野老 和漢三才  
 葉願る 著黄ふ似く小白花と云ふ 青と云ふは 結ぶ三稜  
 あり其根老蓋著黄の形ふ類す俗に野老と云ふ 兼と云ふ  
 春



海老うなぎ共とも **兼三春物** **鳥嘯** 水鳥嘯

嘉祝の食物けしき **鳥嘯** 鳥の異名

古今百千鳥ここんひゃくせんとり **鶏冠菜** 和漢三才

二月東福寺にがつとうふくじ **懺法** 図会

惠日山東福寺えにちさんとうふくじ 八浴の東南はつよくのとうなん 門前の街道かどまへのかいだう 橋を北はしをきた と一の橋ひとりのはし

と云い 愛宕郡の境あいだわじまのさかい 南と二の橋みなみとふたりのはし 名づつなづつ 即指荷すなはちさしかり の社前の社のまへ

毎年二月まいとしにふたつき 方寸の紙かたむねのし 小芳の字こよしよのな と書か 當寺内とうじの内 の同聚庵どうくわいあん

出で 未火災みひさい 疫病と除えびやみとよけ 〇今日けふ 方丈かぼう 〇おのおの

明兆めいしょう 馬うま 処の観音このくわんおん 三十三幅さんじゅうさんさんぷつ **祈年祭** 官於

の像のざう と揚とあ 職法しやくぽう と修としゆ 〇天武四年てんぶしよんねん 二月ふたつき 始はじめ 周礼しゆらい 祈年しゆねん 求豊年もとゆふねん

也なり 神祇式しんぎしき 祈年祭しゆねんさい 神三十一しんさんじゅういち 百三十二座之内ひゃくさんじゅうにざのち 神祇官祭しんぎくわんさい

神七百三十七座しんしちひゃくさんじゅうしちざ 祭まつり 道明寺祭だうめいじさい 九五日くわつごにち 河内国かんなり 志紀郡しきぐん

土師村とじむら 一名土師寺いちのみやとじじ と云い 中興住持ちゆうきやうぢゆうぢ の尼に 覺毒かくどく 菅丞相くわんじやうさう

の伯母おほはは あるが故ゆゑ 左遷させん の時とき この寺このてら へ立た 〇〇〇〇〇〇

雜談抄ざつたんしょう 當寺とうじ 與よ の天神あまのてんじん とと 天徳日命あめのあさひのみこと の宮のみや 菅くわん 霊れい の社のてら

二社ふたてら 合あ 〇この二十五日このにじゅうごにち 小祭こまつり とと 道明寺祭だうめいじさい 〇世よ

道明寺だうめいじ 備ひ 〇〇〇〇〇〇 **鳥巢** 古巢 五雜俎羽族之

此寺このてら の比ひ 丘かみ の手業てのわざ 〇〇〇〇〇〇 **鳥巢** 巧過於人其

為巢たむけ 只ただ 以もつ 一口ひとくち 兩ふた 爪つめ 而して 結束くわつご 牢固たうこ 甚た 於こゝ 人ひと 工たくみ 大おほ

風かぜ 拔は 木き 而して 巢たむけ 終つひ 不傾たふさ 也なり 雜木ざつぼく 枯枝かきえ 縱橫じゆうかう 重疊じゆうたう 不た

知得ちとく 膠固かうこ 無急むきゅう 此理このこと 之の 不可曉しるはず 者もの 凡鳥たゞし 將生卵まじまじたまご

其雌雄そのめおとこ 營巢たまごをたむけ 成なり 而後遺卵そのちのたまごをのこす 伏子ふし 及長成ながくた 飛去とび

〇〇〇〇〇〇 **鶏冠菜** 和漢三才

二月東福寺にがつとうふくじ **懺法** 図会

惠日山東福寺えにちさんとうふくじ 八浴の東南はつよくのとうなん 門前の街道かどまへのかいだう 橋を北はしをきた と一の橋ひとりのはし

と云い 愛宕郡の境あいだわじまのさかい 南と二の橋みなみとふたりのはし 名づつなづつ 即指荷すなはちさしかり の社前の社のまへ

毎年二月まいとしにふたつき 方寸の紙かたむねのし 小芳の字こよしよのな と書か 當寺内とうじの内 の同聚庵どうくわいあん

出で 未火災みひさい 疫病と除えびやみとよけ 〇今日けふ 方丈かぼう 〇おのおの

明兆めいしょう 馬うま 処の観音このくわんおん 三十三幅さんじゅうさんさんぷつ **祈年祭** 官於

の像のざう と揚とあ 職法しやくぽう と修としゆ 〇天武四年てんぶしよんねん 二月ふたつき 始はじめ 周礼しゆらい 祈年しゆねん 求豊年もとゆふねん

也なり 神祇式しんぎしき 祈年祭しゆねんさい 神三十一しんさんじゅういち 百三十二座之内ひゃくさんじゅうにざのち 神祇官祭しんぎくわんさい

神七百三十七座しんしちひゃくさんじゅうしちざ 祭まつり 道明寺祭だうめいじさい 九五日くわつごにち 河内国かんなり 志紀郡しきぐん

土師村とじむら 一名土師寺いちのみやとじじ と云い 中興住持ちゆうきやうぢゆうぢ の尼に 覺毒かくどく 菅丞相くわんじやうさう

の伯母おほはは あるが故ゆゑ 左遷させん の時とき この寺このてら へ立た 〇〇〇〇〇〇

雜談抄ざつたんしょう 當寺とうじ 與よ の天神あまのてんじん とと 天徳日命あめのあさひのみこと の宮のみや 菅くわん 霊れい の社のてら

二社ふたてら 合あ 〇この二十五日このにじゅうごにち 小祭こまつり とと 道明寺祭だうめいじさい 〇世よ

道明寺だうめいじ 備ひ 〇〇〇〇〇〇 **鳥巢** 古巢 五雜俎羽族之

此寺このてら の比ひ 丘かみ の手業てのわざ 〇〇〇〇〇〇 **鳥巢** 巧過於人其

為巢たむけ 只ただ 以もつ 一口ひとくち 兩ふた 爪つめ 而して 結束くわつご 牢固たうこ 甚た 於こゝ 人ひと 工たくみ 大おほ

風かぜ 拔は 木き 而して 巢たむけ 終つひ 不傾たふさ 也なり 雜木ざつぼく 枯枝かきえ 縱橫じゆうかう 重疊じゆうたう 不た

知得ちとく 膠固かうこ 無急むきゅう 此理このこと 之の 不可曉しるはず 者もの 凡鳥たゞし 將生卵まじまじたまご

其雌雄そのめおとこ 營巢たまごをたむけ 成なり 而後遺卵そのちのたまごをのこす 伏子ふし 及長成ながくた 飛去とび

則空其巢すなはちそのたまごをのこす 不復用矣たがひなくす **三月桃花粥** か部寒食

月令廣義げつれいかうぎ 唐徳宗たうたうていしゆ 以上いじやう 已い

為令たがひ 節せつ 桃花たうは 節せつ 據たがひ 之の 手て

列子れつし 左傳さへん 事文類聚じぶんるいじゆ 〇〇〇〇〇〇

理り 清涼殿せいりやうてん 南階なんかひ の前のまへ 〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇 仙納弥市せんなみち 此この 〇〇〇〇〇〇

勝負しやうぶ と決き 是こゝ 〇〇〇〇〇〇 行事かうじ と称なづ

土佐海とさうみ 硯いん

春と







本朝食鑑二月彼岸小種と下子三四月小苗と生ず葉  
采三畧蔬より食ふ足る五月黄花と開く初に綻る

野菊のこころ  
二月中和節 李泌傳唐德宗上巳  
一花子と結ぶ 九日と以て皆宴樂を

二月朔と以て中和節とせんを請ふ云上巳九日と  
加へる三令 山櫻の一種あり又小櫻のるふ  
節とあり 別種しを接ふ山櫻のるふ

紅色と含み羨しく愛らる  
花あり故小見櫻の称ありを 蝶 胡蝶黄蝶蝶々  
時珍曰蝶ハ鬚羨ふ蛾ハ眉美さる故又胡蝶と名づ  
俗ハ鬚頭と胡とす 格物論一種大蝙蝠の如く或黒

或赤或青斑まをもの鳳子と名づ一名鳳車又鬼子  
新撰字鏡 加波比良古 莊子齊物論昔莊周夢胡  
蝶も栩栩然として胡蝶也自喻で志ふ適ふ周  
周ふるも栩栩然として胡蝶也自喻で志ふ適ふ周  
周ふるも栩栩然として胡蝶也自喻で志ふ適ふ周

三月

重三 野客叢書今五月五日と重五といひ九月九日と  
重九といふ三月三日といふ亦重三といふなり

長春 時珍曰月李花ハ處々人家小多く栽て  
挿し亦薔薇の類し青き葉青き蔓硬く刺

厚辨あり月と逐て開放し実と結ぶ 丁子草 天  
本草葉ハ柳の葉に似く中の堅筋 茶摘 茶ハ春中始て

嫩葉を生ず蓋焙て苦き水と去り其を末しく飲へ  
本朝食鑑九茶と採の候ハ十八夜も氣候の違  
速小隨うハ十八夜の前夜と宜し宇治の茶師馬場氏  
信俊曰始て茶と摘むと手始と云九三月朔日或三日

正月履端 左傳先王之正時也履  
端于始舉正於中歸餘

兩のこの 小土器各義を詳し疑  
ハ開豆開牛房の兩種と土器盛て  
雜煮の膳の左右を此兩種と盛物とする略語又料  
の物といふも兩種と盛る料とすこの 年浪草

春 りぬ



臨時客

年中行事哥合 正月二日、臨時客とて、攝政關白の家へ春の始、大臣以下の上達部と招て遊ぶ。公發ふとあつね、臨時客とて侍る。大方大臣の母屋の大饗、八年とて、行侍る。鷹銅を渡す。履新之慶 季吟曰、履端ハ端とて、其興とて、行年とし。

三月

履新と同らん、改年の御慶をいにて、唐の時三月、鑊人蒸餅とて、鑊人ハ此方より、雞人形のこひちり。

流觴 宋馬志開本、林檎樹奈とて、水の糸出、二月粉紅花とて、子亦亦春。

ぬ 兼三春物、毛衣子、て、鴨。

正月 御降

大服 大服とハ、点茶の名、記事、其式茶と点、塩梅、山椒と茗碗の内、山漬、合家、こと、のむ、又、賀、

ふ献ず、とて、大服とて、季吟曰、元日ニ大ふ、ふ、とて、茶と大福との形、用、とて、大服ハ去年の青葉の白、押鮎、江次第、元日、押鮎、一、塩、鮎、の鮎、防川、押鮎、坏、王佐日記、元日、用、ひ、

女王祿

とて、其年長す、故、新年嘉祝の食、とて、其、女王、祿、賜、とて、其、祿、法、人、別、小、絹、二、足、綿、六、屯、と、あ、江、次第、お、委、一、公、事、根、源、云、女、王、祿、と、字、ハ、書、

男踏歌

公事根源 踏哥とて、正月十四日の男踏哥の、とて、侍、と、て、近頃、お、か、い、侍、る、ハ、女、踏、哥、と、て、ハ、十六、日、ハ、光、源、氏、物、語、

武天皇の御時、とて、聖武天皇の御時、とて、お、あ、と、て、又、曰、田、融、院、天、元、六、年、正、月、十、四、日、有、男、踏、哥、以、

後中絶、西宮記古語、アラバ、レ、リ、と、讀、ミ、曲、の、終、り、ハ、万、年、アラ、レ、と、云、祝、言、と、必、ず、と、ハ、納、む、故、アラ、バ、レ、リ、と、云、

未詳、花鳥余情、男踏哥十四日、殿上地下の四位以、



下の輩... 催馬楽... 舞の

流抄... 河海抄... 踏哥の人綿の造

花と冠の額... 踏哥の人... 十六日

女踏歌... 公事根源... 正月十六日八月の

年始の祝詞... 舞... 故の踏哥

男女... 閨夜... 踏哥... 鳥羽王の閨の夜

江次第... 女節分... 疫神詣り節分

夜... 疫神と祭... 男ハ夜分... 赤詣り女子

十九日と節... 女節分... 吉田の清枝

女礼者... 鶯宿梅... 大鏡

帝天啓年中... 清涼殿の梅樹枯... 勅志

梅と... 西の京何... 家の

梅あり... 花開け... 其色深... 其香濃

應... 主の女枝... 短冊と着... 献す既... 禁

庭... 主上... 見... 歌... 勅... 齊蒿摘

記貫之女... 相国寺中... 齊蒿摘

扱薺菜... 名裁蒿... 和名於八木... 崔馬食経... 状芥草... 似

香... 夫木... 夫木... 雪... 大芥

信実... 部... 兼三春物... 臘月

不暗臘月... 新古今... 曇りも... 於胡海

春の夜... 月夜... 物... 大芥

和名扱... 海中石上... 乱髪... 二月

如く... 青色... 東海... 二月

秋莫... 黄梅... 大和本草... 黄梅... 樹... 溼草の

世部... 可見... 黄梅... 大和本草... 溼草の

春

春

春

春

春

春



下ふ載て曰高きところ三三三三方る莖厚葉初生の小  
椒葉の如ううと齒を一面青く背淡くし言  
久いと同じ正月ふ黄花と開く故迎春花と名づく  
花のうらら梅に似たり故に国俗兼梅とらふ **大**

**原野祭**

上知日山城国乙訓郡ふの春日と同神  
公事根源この神ハ皇后の春のそんため

本社遠くふく都近きとふふは **踊念仏**  
奉らふこれ大原野行啓るこの侍らや

毎年彼岸の申日に撰州四天王寺念仏堂に此寺あり  
天筆の名号といハ菩薩の画像と掲ぐ念仏修行を  
相傳ふ良志上人洛北鞍馬の毘沙門天より感得の御影  
ありし今日平野大念寺来りて法事を修行す法会も  
ふ大和河内の道心者来りて各十徳と着し鉦と  
付て手持りて踊るふあふぞ一心不乱念仏  
あり誠ふ感ふたたく踊るふゆふ大和河内の者  
といふ由緒正しと豪家の禪門ありて此法席ふ  
入事と許しぬと此寺の西門ハ極樂の東門ふあり  
故に昔より浄業と修するの人此寺ふこらて西海の

落日と観する弘法大師とこの西門あり日想観と修

多し法然上人も此地西南の一字今世号ふありて落日

小浄土の觀とありし由日記にも侍らふや今も諸人

弥陀の來迎と拜せとて今宵彼岸の中日群集する

是没日ふ向て淨刹 **秋の燒原** 野火の 燒ゆる 跡の萩

の方と拜むの遺意や **原と三年浪草** 引説とも皆さう 後撰集

とびのきけのうららさう若菜つとて誰とささむ

兼盛王のこの哥の詞さう **萩の若葉** 萩の初生言葉の如く 生し漸く葉の立ち

野や霜枯の春風ふ青葉まらけさ萩のやけさう

分まらさう **三月 御身拭** 十九日○山城国 嵯峨 清凉寺の本尊

若葉とて **叙** 迦如來五尺二分の立像あり夫坐毘首羯赤梅檀と以

く作る処に今日開帳す寺僧白巾と以て仏像をぬぐ

拂ふとて御身拭とてこの起る此堂建立の人七日衣

籠のうらら本尊告ふ女父今生と畜生小薄し此堂







若草 新草、三種とも春 藁盒子 部

幸木の若緑 本草松三月糺と抽んぐ花と生ず 長四五寸は是緑と云ふや、糺正月三

寸づ、松緑柳緑も其色の 兼三春物 若布

青黄の間色とりどり 山葵 天和本草 山葵加茂葵ふ似ふ、 其根の形味生姜子似ふ、故ふ

山葵 山姜の名あり、中夏の書に云ふ、漢名云々、和漢

三才圖會 山中水近と石間多く、人家ふくも是と 移し種る、二月種と下して三四月苗と生ず、葉露及

び葵の葉ふ似ふ、六七月穂と多し、二三寸、細るる黄 白花と結 三月 蔽 早藏、鑑蔵、本朝食鑑春

細るる子と結 初藏、蔵手、の初先生ず

ると早藏と号す、○時珍曰、二三月芽と生ず、拳曲とし て、状、小兒の拳の如し、云々、朗詠、紫塵、瀨蔵、入拳手、○ 仙人の基と指さす、蔵汁、乙由の序、云々、この朗詠の句、 塵と瀨との二字、ハ莖と嫩との誤り、下字集、ハ辨、

首の塵、ら、ら、の春の野、ふら、ら、蔵、ハ、とのげ、あ、り、 堀川百

若紫 本草、藤、紫、白、紫、草、ハ、蘭、香、ふ、似、て 茎、赤、く、嫩、青、ハ、二、月、花、と、む、し、く、紫

白色、実、と、む、す、が、白、色、ハ、秋、熟、す、○雜、談、抄、連、排、ハ、若、紫、と 春、不、用、ハ、花、紫、と、秋、不、用、ハ、本、草、ホ、の、説、の、こ、と、二、三、月、花、と

考ふ、若紫ハ、春、月 三月 若蔣 本朝食鑑蔵

池沢の中に生ず、二三月白井と生ず、筍の如し、 若點 訓、麻、古、毛、江、湖、 古、訓、古、毛、江、湖

是、菰、苜、蓿、白、菰、菜、也、○若、菰、と、り、て、り、 此時、農、民、種、と、撒、の、事、ハ、九、立、春、の

忘霜 八十八日の夜あり、必霜あり、諸木の

花房嫩芽、こぼれ、あ、ち、時、ハ、多、く、枯、る、故、ハ、此、前、後、菰、蔦、を

以、是、を、蓋、ハ、霜、氣、と、り、て、身、を、侵、さ、す、の、事、ハ、宇、治、の、茶、 園、殊、ハ、こ、も、と、畏、る、ハ、八、十、八、夜、ま、る、時、ハ、霜、と、防、ぐ、の、菰、蔦、と

撒、す、八、十、八、夜、の、後、ま、る、霜 正月 門の神棚 故、ハ、忘、霜、別、霜、と、り、

春 わか



李吟曰在家の妻は小棚と構へて神を祭る。夜はつらつら  
灯と供へ侍る。○未其義と詳るべし。按ふ月令廣義  
云除夜門神と祭る。注道家門神と謂て左と門丞と  
右と戸尉と云。益一門と司るの神。其義桃符よ  
る本で、神茶爵壘と以て、邪と辟る故。門松立松  
と云ふ。千門の樹る。本朝此意を據る。

**飾松、飾竹** 世諺問答 門の松立ると昔よりあり  
來りてありあつて、松八十年と契ふ  
竹八万代と契ふものあり。ハ

**飾繩、飾藁** 注連飾  
年の始ふいし月用る。ハ

**飾炭** 本草  
のし左ハ清淨なるものなり。と云ふ。つらつら  
ちり、淨不淨と云ふ故。神事の時、  
必引し正月の神を祝ひ祭る。つらつら

**飾海老** 紅蝦俗ハ伊勢海  
白炭除夜立之戸内亦  
辟邪惡云此の義なり。ハ

**門の禮帳** 明世説新語排  
國俗春盤ふくむと用ふ、  
ひとと稱して賀祝のもの

皆出賀惟置白紙并筆硯于几賀客至記其名ハ  
これ本邦より年始五節供ふ出す賀客帳と同ト

**子** 規祝の有とす多子の義も取るなり  
本草 鮒の子ハ臘月歳始及び婚家以て

**和漢三才圖會** 搗の訓と勝の字ハ  
わく、諸勝負の利ありを悦て用之

**懸鯛** 紀事 元日小鯛魚一匹藁索を以て  
糸を云 兩喉と結び齒朶并由都里葉と挿

く竈の上懸て、是を掛鯛と稱す。六月朔日に至て、和  
美しく食之云、わくのこころをさる。時ハ温疫痢病諸の

**邪氣と 粥木、粥杖** 十五日粥の木より女の尻より  
く打とす。女ハ粥杖と防と。枕草紙袂衣物語に

みまらふ、ちんれい本支たふまらふハ 紀事 追加ニ云、信  
濃飛騨、三河の三國より漆膠の木一尺二寸づら切り

上下より削り、さねの方に丸巻のちんれい或ハ柳櫻花の  
ちんれいそのと紙や切り粘りて松煙をくちんと煙へ其

かちんとく除れ、白く其模様残る、是と名づけて柳







陽炎

又降... 陽炎或曰...

川柳

水揚... 其葉円...

門柳

陶淵明宅の辺...

風見草

柳の異名... 蔵玉...

二月春日祭

上申日... 大和国...

御... 前夜京... 勤... 此事... 前日... 関白... 輕重...

廿五日... 祭礼...

貝寄

羅... 未詳... 二月廿日...

の浦... 此沖津風... 養の造花...

髪草

本名未詳...

上官太子の前... 髪... 髪... 髪...

白鳥

白鳥...

かほよ鳥

八雲御抄... 恋...

若菜卷... 花... 杜若...

春か















頭坊より施行の儀あり、近國の貧人乞巧穀を来集る

雜談抄 摂州平野大念仏寺の本尊一仏十菩薩の画像

二供する元朝の餅と、歳首吉野山蔵王の神人奉り此餅

と詰り、叔蔵王権現へ備へ供養式終り、此餅と破碎

多くの米を炒り、炊き又餅とゆ、今明日本堂に於て

諸人施す是と餅配し、又吉野山中の僧俗へ不残

賦り、○山と圓軸山と号し、寺と金峯山寺

といふ役行者の開基、本尊へ蔵王権現三鉢

本冊 春月嫩艾と来て菜を煮、食ふ、或ハ麩ふ和り、銀

餅とゆ、一切鬼悪氣と治す、大和本草

小用故、二月三日、採り

とす、次小五 **三月 楊花粥** 各部寒食

本朝食鑑 艾餅ハ嫩艾苗と米り、豆と煮、熟し

煮糰、合七揚り餅、作す、三月 **吉野の會式**

三日必この餅を用ひ、賀祝す、十日、吉水院の寺説す、大和國吉野山子守勝手

の兩、明神の神典、本堂へ渡御、旧記に、三尊兩社の堂前あり、

一切經會修行とあり、中古以来仁王會修行す、法華と

もく、兩神典還幸、又云三月花の頃とて、花會式と古

来より傳ふ、山中行事、日数 **吉野草**

ホもり、花會式と云、花見の、櫻の異名、吉野とオ

ナ、名、**楊貴妃櫻** 奥福寺の櫻

愛せ、故名とす、一説ハ此花大輪、紅色と含み海棠の

似、故ハ海棠の睡とて、故事、名、

**呼子鳥** 此鳥のこと、古今集三鳥の一とあり、諸

説、又ハ山鶴、又ハ鶯、郭公、を、の鳥、

と、**年浪草** 或書ニ云、呼子鳥ハ喜小

喚起鳥とて、春の中つ、鳴鳥、爰ニ、鳥のこと

也、く、鳥の子と呼べ、來る故、又、

此鳥ハ、四月の部郭公の來る、啼鳥

こ鳥ハ、春の暮より夏にかけて啼鳥、此声ハ、

呼子鳥とて、鳴、

啼鳥、此声ハ、

呼子鳥とて、鳴、啼鳥、此声ハ、







以粟稗麥豆為蔭田種子以稻  
兼三春物玉  
為水田種子因定天色君

柳 稱美の名し玉椿  
二月 薪の能 或、芝の能  
玉拍

七日 南都興福寺南大門前能くも元是興福  
寺夜中の法全の間寺僧の奴僕春寒ふたふた門前  
おいて火を焼其光を照らす排優とあり長夜の

座東武にあつ南都休暇の両座をれ動む今七日二座  
交り動之八日も亦あつ如く九日至き六初日一座衆  
徒ふ告り若官の前小於く藝を施す其日次座門能と  
動む七日之間雨ふも八十四日臨時ふも動む

鷹鳥化為鳩 月令 仲春之 蒲公英 本朝  
倍ふ藤菜と称し或鼓草と称す俱ふ名義未詳の  
雜談抄冬ホの名鼓草とつる名より出とる也

田螺 和漢三才圖會 和名木 種井 種浸 種  
都比俗あり太仁之

ふさふさ 紀事 二月土用の中吉日とて農民旧  
穀の種を水田にまき 和漢三才圖會 九田  
と作る彼岸の前十日穀と水とを彼岸の後十日

ふ取出し種とむすこも苗代と云六七日とて苗  
生ずの種井八種 大根の花 時珍曰春の末ふ高  
と漬る井とりや 赤雅翼野人今歳山と焚

碧色あり 田畑野山焼 赤雅翼野人今歳山と焚  
とこ、末歳 萩菜 敏菜

三月 高雄の法華會 十日 高雄縁起云  
安良比花 三月十日紫野

ふ人あり集りて高雄の法華會ヤスラニテヨと云こ  
とヤすいふまふと云すこ 百練抄 久壽二年四月迄  
日京中見女風流と備へ鼓笛と云々紫野の社ふあ世小  
夜須礼と号す勅ありて禁止す 紀事 今日やまひ花

の神事辰刻から上賀茂南上野村の土民烏帽子素袍  
と着し或ハ異形の装ひを各一村の捨堂と集り上人  
村里の中一草堂を造り常小僧とて守り

とら度あると云ふこの堂ふあつてと謀るこれと

春 た



捨堂と号す是より先光念寺の北上の御前の社に詣りて各異口同音小安楽比花と唱ふ太鼓横笛の節と助くもの後大源菴の社下の御前の社に詣りて踊と唱ふ踊と唱ふ上野村の捨堂お歸る是より一の里正の前より踊早て各家より又上賀茂梅辻邑本河と三ヶ村の土俗今宮に詣りての踊と催すこと上野村の如く踊と唱ふ後各賀茂お歸る時社務及社司の家にお歸るとす到るは其家の主人肩衣と脱ぎて踊と唱ふ是と期く踊と唱ふ身を纏頭の微意故傳ふ春時疫疠多く行ふ今宮ハ疫神に故踊と唱ふ神と勸め祭ること或説ふ花もこの祭りに花と落と惜風雨を乞ふ祈る故小安楽比花と唱ふ又一説小今日高尾神護寺の法花会動れば魔障お故踊と催し魔と防故踊と唱ふ花と安楽比花と法花平安お終ると祈ること此説す踊と唱ふは雑談抄この祭ハ寂蓮が興行せしむ今土人の難し唱ふは寂蓮の作とす天木高尾山ありありなるつらめやまの花と竹秋廣韻藻竹秋三月也蘭秋七月也贊寧竹

譜八月為春二

正月 靈辰

唐李嶠人日 詩七日最靈

三月為秋云 辰注以人為万物

二月 列見

公事根源上卿并外記史も

之靈故謂人日 太政官少六位以下の藝能あるものとすのて式部兵部の二省とも率く上卿めりて器量容儀と見るとり挿頭の花と上卿以下冠と大臣ハ藤の花納言ハ櫻の花恭議六位ハつらめり花ハ非参議以下ハ時の花とす江次第云列見

二月十日 諸司長上成撰人列見太政官二省申之

和名抄 和名以多知久 佐一名以多知波世

正月 奏瑞

邦朝賀 余出ス

雜者 祝

食多種と交へ者故雜者と 布打あひひこ 蘇民将来 厄神詣の送窮 廿九日 四時宝鑑 高陽氏の子衣 余出ス

春 礼



死す世小聚と作て破衣と巷口小捨く貧鬼とのぞく  
又池陽の風俗正月九日と以て窮九とす屋室の塵  
穢と掃除し是と水中に投るを送窮と云五雜俎謝  
肇淵曰俗説信ずる足す窮也窮也皆晦盡の義也  
諸月といふ今も独正月といふハ其端を挙る也

○按る小送窮ハの  
方々晦日掃る也  
**兼三春物素麩海苔** 長  
色青黒し海  
素麩是なり

**二月園韓西神祭** 雍州府志云舊  
宮内省少を後

禁庭に移す古春二月冬十一月上五日と祭る冬  
議一人祭所成就事と行ふ式西宮北山両抄詳あり  
相傳ふ延暦年中遷都の時處と他處へ易へんと神  
詔く曰唯この地まゝ人々皇基と護るべしと今ハ  
其社あり惜いぬ紀事追加云浴陽醒井通高辻  
上ル町小社あり延喜式所謂園神  
一座韓神一座と云是今本荒神と云

**井** 紀事江州大津の人三井寺門  
前の人と各野原をわけて左右  
水の糸出 **經曳** 前の人と各野原をわけて左右

小分列して互に大經と争ひ引両方とも太鼓とら  
たのふまゝ進む勝方其年福と云是と綱引と  
稱す十三日より十四日の朝ふ至て **継尾鷹** 鳥部鳴  
去ると云この戯ま所くも云 **兼三春物** 鳥狩の

糸 **土筆** 和漢三才圖會春月土筆  
出 狀筆の頭のみ

**摘草** 雜菜摘 通俗志 雜菜 磯菜 角組芦  
雜草摘る也 雜草摘ハ春といふ

芦角 ○支考曰おのもをりつるハ牛の角の如く組む  
芦錐 〇野相公詩碧玉寒芦錐脱囊 新古今  
三島江や霜もやむむぬ芦の葉ハ **椿** 山茶 海石櫛  
角むむむの春をぞと云 通光

細漢三才圖會其葩厚く大なる艶美なる牡丹芍薬  
亞ぐ惟恨らくハ其萎むると甚醜く其落ると亦脆と  
の單の瓣赤とものと山椿と名づ此乃ち本源あり  
白紅粉紋紅或ハ白相半すハ重十瓣 權枝奉せ  
す秋も蒼と生して春花と開く冬開く **列椿**

ものと早椿と名づく人以此と賞す **列椿**  
春 一



万葉 巨勢山乃列々椿都良々々介見作思奈許

端乃春野乎ハ哥より作例もあつてつづく

木の敷本列あり。○唐椿葉狭く長く色淡く

生くる椿と云ふ。○唐椿葉狭く長く色淡く

みく整状に似たり其花重瓣大なり

○正紅ちりしつゆの蜀茶

八千代の 莊子大椿と云ふの八千歳と云ふ春に

玉椿 八千歳と云ふ秋にす 後拾遺君が代も

わづらもあつて玉椿と云ふ色ハあつてゆめ

○伊勢椿 花形のかまゆり 落椿 散椿 櫻椿

くしも昔や 鼓草 蒲公英 二月 接木 接穂

月令廣義 梨と接く春分の前十日と用

天和本草 地錦葉衣の紋を付るつゞく似て冬月葉落

す秋ハ紅く又常のつゞくハ冬葉落つ秋ハ紅葉す

燕同巢

この西種の若葉運速あり冬葉 燕同巢

ハ芽より遅く夏葉も早し 燕同巢

淤波天女和名豆波久良女俗云豆波久良又云豆波女

三才舎金 燕ハ玄衣白頸赤黄の顔春来り秋去る雁見

と表裡より其飛翔多し甚捷く直小翻り仰る亦能

飛他鳥のあつてつゞく故小雁鶴あつて散せり

時珍曰泥とつゞく 三月 芽花

屋宇の下に果ふ 油桃 花常の桃より小なり

花と開く 和名秋李桃 和名都波 壺董 萩枝折

千金翼方羊の花と云ふ 躑躅 故小志より一説羊の性至孝此花の赤

と云ふ母の乳と思ひ躑躅と膝折る飲之故と云

躑躅衣 桃花御記面蕪芳裏音打三月着之云日記

面紫裡紅岩つて面紅 山 時珍曰高

裡紫白つて面紅裏もあつて 四五尺低

春



二又、枝少く、花繁し、一技数尊、二月始て花と開く、紅さく

あり、紫さく、五出さく、千葉さく、一名紅躑躅、又山

石榴、又映山紅、白、**万葉**、細比礼乃、鷲坂山乃、白堂

又、杜鵑花、**躑躅**、自吾介尼保波氏、妹余示、作書

○**羊躑躅**、韓保昇曰、小樹、高二尺、葉ハ桃の葉に似て、花黄し、

瓜の花に似る、**和名抄**、羊躑躅、以波豆々之、一云毛

知豆、**蓮花**、**和漢三才譜**、羊躑躅、一云八九

々之、**尊**、遠望ま、蓮花の如く、故名之、

按、本草ハ、羊躑躅、蓮花ノシト訓ス、韓保昇ノ説モ亦蓮

花に似し、**繡**、羊躑躅、同物ト見ゆ、俗別種ト云

○**浅葱**、**天和本草**、葉ハ大霧島の如く、枝蔓のこじ

はじ、小木ハ、棉花に似く、小色アサギ、云

大山の岩上あり、**同上**、紫花春、突木の高

深山、**紫**、一文許さく、常のつど

の三倍の大サあり、花ハ、葉三角、野州日光山中に

多し、土人ヤシホト云、又白花のもの、又土人白ヤシホト云、

○**姐**、洛外山中多し、花紫色、小輪紫の、**瓔珞**

つじ、映山紅の花に似て、葉三角、花可愛

紫の花小く、枝は連う、咲て下り垂る、**平戸**

こと、瓔珞のごとく、故名づく、**躑躅**

と云、平戸ハ九州の地名、琉球より出づ、四月

花と開く、單瓣白、其大なる者、二丈に至る、**段**

地名、上賀茂の南の山、壇と云、好む赤紫、**本草**

精蓮花四種のつじを、壇段西字共書来り、**茵**、**細目**

苗、**あい**、**和名抄**、山榴、和名阿伊豆々之、**本州**

ササキと訓ス、**つじ**、時珍曰、深紅色者、即山石榴云、

○**あし**、白紫の數品あり、と大隅

**ね**、**正月**、**国霧島**、山より出せり、

**年始状**、注、**子日游**、は部初子、**子日夜**、何て

不及、**猫**、**猫の妻戀**、**猫さくる**、**羅談抄**、此著

日の遊み着用、**猫**、**猫さくる**、**陰歎**、然ハ

の衣と云、**陽氣**、犯さきて、**交合**

好む、是と猫の戀云、**二月**、**涅槃會**、**涅槃像**

二月のころ、**仏**、**楞嚴經**、涅槃、乃清淨不死不生

之地、一切修行者、所依歸、注

春  
ね



超脱輪廻出離生死之地と云々死と云々如來  
御年七十九二月十五日大衆示已て頭北西右  
脇に減りぬまき八天蔵一覽入減品よ出づ〇涅槃  
像ふ五十二類天道人道地の三十六禽江河の鱗魚天地  
の間生を受るるもの皆愁歎の容形を画く也  
是と二月の別仏のころ去一仏さどやすあ



正月菜摘川神事

七日 神社啓蒙 勝手明神の社  
大和国吉野川に在る祭る所の神一

座受鬘神、毎年正月七日此社の神人氏子の男女此川の辺に  
至り若菜とて勝手御前の神供備へ祭祀とす故菜

摘川神 内宴

全事根源内宴と云々、の節会に壽殿  
事と云、行ふ文人と題と云々、詩を作

七日正月

俗正月七日と五節句の初とて  
七種の菜と云々、遊宴とて嘉

七草

是と食ふ人万病なり〇七種ハ芥薺芹薺菜

薺打

是と食ふ人万病なり〇七種ハ芥薺芹薺菜

藁佛座、菘蘿蔔、世説故事七種の菜と打と、諸子の  
考へて見ず、按ふ事文類聚、歳時記と引て曰正月七日  
多く鬼車鳥渡る家、門と槌戸を打灯燭と滅く、  
こまを襦ふと和俗七種と打唐土の鳥、日本の玉地へ  
渡らぬまきと唱へ、此鬼車と忘む意、夜と打ハ鬼  
車鳥の止むまきと云々、襦ふ、太平廣記、鶴鳴、即、鶴  
あ人名姑獲一名夜遊女又ハ鬼車と名、春夏の交  
稍陰晦、遇ハ飛鳴、山嶺外、過ハを多、人家入  
人の魂氣を録す、或云常血と滴、  
血と滴らるる家ハ山谷、あると云、  
鳴鳥狩、泊山、朝鷹  
鈴子す、泊山とハ山野、出入宵小雉子の鳴所と聞  
継尾鷹、置て未明、行て鷹鳥の雉子と捕らする  
と、泊山とハ鳴鳥狩とも、聞まを鳥、朝鷹鳥とも  
云、〇鈴子指ハ鷹百首抄云、是ハ泊山泊狩、あ、た  
う、わ、鈴子、鈴子と云々のとて、鈴の鳴らざる  
や、わ、鷹とす、く、狩と合する、鳥とを、あ  
う、わ、の、鈴子、継尾ハ古、継尾の鷹と云々の、あ、  
鶴の尾と云々のと接、何の用と云々とて、あ、近世尾羽

春 九



損傷 或ハ短小なるもの  
他の鷹の尾と以てこれと接

兼三春物 永日 遷暇

詩国風春

二月 苗代

朝食鑑 三月蒔きのと民俗

苗代と云 穀種を用て俵子に充て川水に漬す十五六日或  
八八九日及び廿日三十五日もやとて取出して俵子と  
ひくく四五日六七日と経て後ハ假田の事と時と苗代と云  
○苗代と云名ハと種とあるす如の田と云て云代とハ  
七十二歩と十代と云やとて 田畝の敷と五百代十代と云  
代も同じと云 轉て云 春田水と引種蒔きの各目と  
云と

水口

本朝食鑑 凡種苗水と得ざるは枯る故に苗

祭

代水と引の祭と云 ○早損水損の事と云

苗代菜萁

和漢三才會 胡頹子大根  
三種あり其葉と実と皆  
ぬき祭るとして

火異あるもの 一種春月小當りて 苗と種時実熟す大と小  
と東の如し 苗 時珍曰 松ハ今人白菜と呼 二月  
代胡頹子と云 菜花 黄花とむと云 苳の如し 四辨三月

齊花

和漢三才會 粟地ニ布て生ず 形ち  
蒲公英の如し して微硬く 香氣あ

亦芥の如し 己実と結ぶ 三角と末大く 本窄と云て 三枝の撰の如し 小兒  
其ニツと云く 相磨きハ音あり 故ニ三線草と名づい 庵厨

三月 東東の粥

食の素出

の花

大和本草 夏芽と云を故ふもつと云 ○藤文曰 三在京  
の間束の芽たち又花と云ふ上の説の如く 夏ハ俳諧

活法の書ハ三月小生す 恐らくハ誤と云ふ 凡末ハ四月小葉  
と生ト 五月葉稍く長ト 葉の間ハ小白花と開く 微音し

梨花

時珍曰 二月白花と開く 雪の如く 六生 ○棠  
上巳ハ風をなすハ実と結ぶと佳あり

時珍曰 棠梨ハ野梨と云く 處ハ山林の事 ○軒の 軒ハ  
其樹梨ハ似て小く 二月白花を開く ○梨 梨ハ生

大ハ 葶生の 伊勢国葶生の 奈良櫻 沙石集ニ  
と云 ○浦梨 浦梨の名アリ

都ハ八重櫻と云ふハ當時ハ東田堂の前ハ上東門  
院ハ福寺の別當ハ仰せしハ櫻と云ハ身ハ堀り車に

春 ちよ



入てまわせると大敷名と得る櫻と左右に奉らんと  
僻事ありと打らるる女院とて、奈良法師ハ心  
あきまのと思ひ、（？）のり大衆、真小色ふりて  
て、此櫻をバ我櫻と名付んと、伊賀国余野と云庄  
と、（？）花の庄と  
名付けてかごとせしめ、ふとみ  
草耳、蘇頌云  
草耳ハ其葉

言白く白華細莖蔓生す、四月中子に生す、時珍曰、（？）  
蒼八葉蒼耳に似て微長く地菘に似く、稍薄く、（？）對  
て葉と生し、皆細毛あり、肥壤に一抔、技と分つて十八  
九月小花と開く、深黄色、中心長き子あり、徒然草  
めふとと云、草あふらんとよされし人、（？）  
此草をつて身をもす、（？）と云

夏と待ら三月禮拜講  
台記後一条院御  
宇乃壽二年大官

権現の託宣ありて、叡山大宮の空前、て法花八講と修す、  
せう、以来毎歲三月二十三日、（？）と行ふ、（？）と本禮拜講  
と云、新禮拜講と云、八月廿五日、十禪師の社前、て、（？）  
と行ふ、是又後堀川院元仁元年、慈鎮和尚の本願を、（？）

む 正月 結昆布  
新年の雜煮、（？）と云、（？）に訓のちり

二月 紫の塵  
部敷の、（？）和漢三才圖  
会大さ尺

三月 麥鷓  
今朝食鑑三四月田麥長き時、（？）  
取るとを呼んで麥鷓と云、（？）

正月 裏白  
去部齒、（？）雍州  
所志

北野社、正月四日裏白の連奇あり、九連奇懷紙四枚、（？）  
中古執筆誤て、（？）と脱し、（？）と記さる、（？）と流例  
と云、（？）、（？）を白紙とす、故一枚、（？）、（？）  
と云、（？）五枚と云、依て号す、（？）、（？）  
馬來始、（？）、（？）

謡初  
雜余、（？）、（？）、（？）、（？）、（？）  
江次第上古有出御南殿皇太  
子參上儀近代不行春宮被

春 らむう



歌如杖其木榿櫃三束木成三束比々良木三束  
東半保色三束黒木三束桃木三束梅木三束  
樽三束公事根源御杖持統天皇正月の卯日大學寮  
是と奉る日本紀又七壽二年正月小諸衛府祝杖  
と献精魅とおす是と以て悪鬼と拂ふ  
作物所すすむと造物の其上の岩の中御坐氣  
の方の敷はとはくく如杖ありむ雑談抄今の世の賀

成く如杖く在家をふく一尺余の白く削る  
る木の日陰のくと纏ひく俱利伽羅音の形の作る物も  
一のの中年中魚氷の上る  
の悪氣と魚泳る  
氣の乘り魚泳る  
出し氷の上るか  
是と管菜と号すいんハ管  
の鳴く時の當る生む故  
先生の歳時記も西國も此日薄暮も明曉に至る  
も土竜と打く葉と束ねて地と打くと浪花

魚氷の上る  
月令孟春之月魚  
上氷孟春発端の  
本朝食鑑其生して二三寸  
あらとのと未て蔬とあす  
歳内正月十四日  
此事あり貝原

是と管菜と号すいんハ管  
の鳴く時の當る生む故  
先生の歳時記も西國も此日薄暮も明曉に至る  
も土竜と打く葉と束ねて地と打くと浪花

あらは此日地上と海嵐と繩あらと曳あらと鉦太鼓と  
打て拍す所あり和漢三才孟全解嵐海嵐と畏る串海  
嵐の排を以て花園とちの梅  
初生の蓋ハ元と開花ハ亨たら子と結ぶハ利と成熟  
すハ貞と梅ハ四貴あり稀と貴て繁と貴と  
を老と貴と嫩と貴と人瘦とたつといまい  
肥とを貴と茶と貴と開と貴と梅数  
吊あげく計と中華ハ大度山嶺梅多と名勝の  
地と日本もハ山洲日野梅畑鞍馬高雄伏見の  
梅林その外諸洲多ハ九梅のと范成大梅譜と詳し  
○飛梅江梅紅梅鶯宿梅越中梅腹の梅  
こめこの梅未開紅鐘梅八重梅櫻梅  
座論梅○異名好文木この花の凡春  
昔草白草香散見草以上おの頭字の部  
白く千葉草○豊後梅大花白く白く八重白  
深紅と軒端の梅中花深紅紫のと

あらは此日地上と海嵐と繩あらと曳あらと鉦太鼓と  
打て拍す所あり和漢三才孟全解嵐海嵐と畏る串海  
嵐の排を以て花園とちの梅  
初生の蓋ハ元と開花ハ亨たら子と結ぶハ利と成熟  
すハ貞と梅ハ四貴あり稀と貴て繁と貴と  
を老と貴と嫩と貴と人瘦とたつといまい  
肥とを貴と茶と貴と開と貴と梅数  
吊あげく計と中華ハ大度山嶺梅多と名勝の  
地と日本もハ山洲日野梅畑鞍馬高雄伏見の  
梅林その外諸洲多ハ九梅のと范成大梅譜と詳し  
○飛梅江梅紅梅鶯宿梅越中梅腹の梅  
こめこの梅未開紅鐘梅八重梅櫻梅  
座論梅○異名好文木この花の凡春  
昔草白草香散見草以上おの頭字の部  
白く千葉草○豊後梅大花白く白く八重白  
深紅と軒端の梅中花深紅紫のと

春  
う



單葉さう、洛の寺町、誠心院の境内あり、小式部の墳墓

あり、つゝと、和泉式部の愛、如の木あり、○行幸

梅、大花あり、紅あり、千葉、○繪首梅、

○梅屋鋪、

○行幸梅とおね、その予、

臥竜梅、武江水所、亀六、清香庵と云あり、數十珠の梅と

横、て、昨、竜の如、故、小、川、竜の

名あり、○白雲の竜とて、や、梅花、嵐雲、

山中、ハ、梅の咲、て、春と

梅、枝、

知、る、心、を、春、と、

梅花衣、

抄、梅衣、面白、裡、藤、芳、自、十二、月、至、二、月、

鶯衣、鶯神、

藻、塩、草、枝、折、お、神、の、腋、縫、衣

の、袖、と、東、小、袖、と、云、衣、の、色、ふ、あり、今、大、名

兼、三、春、物、麗、

社、詩、逢、日、汗、山、麗、○美

麗、平、麗、好、麗、も、続、く、皆

春色の百花、咲、乱、ま、鳥、獸、山、川、

鶯、

詩、經、出、自、幽、谷、

遷、喬、才、古、今、集、

その谷、う、り、の、声、あ、く、ハ、春、く、と、誰、の、ま、も、

滑山記、正、月、不、至、る、毎、不、鳴、と、春、起、と、云、三、月、不、至、て、鳴、止、と

春、去、と、云、呼、て、報、春、鳥、と、云、和、漢、三、才、論、會、鳴、と、云、尾、を

揺、り、冬、月、脚、と、云、如、一、人、の、舌、鼓、不、似、り、立、春、不、至、て、

始、て、啼、り、李、春、不、止、る、其、声、清、亮、四、滑、く、飛、啼、ま、ま、と

ハ、急、み、て、長、し、法、花、經、と、云、如、く、或、ハ、こ、け、り、と、云、如、く、

月、日、星、と

歌、と、鳥、

鶯、と、云、古、今、序、花、と、云、い、ま、

水、あ、き、む、蛙、の、声、と、云、け、ハ、い、ま、

い、け、の、め、い、づ、ま、り、哥、と、云、い、け、り、け、り、

鳥、と、云、い、ま、い、ま、○と、云、め、鳥、入、米、鳥、短、く、鳥、金

衣、鳥、春、告、鳥、ふ、多、ハ、鳥、以上、鶯、の、異、名、と、云、の、

く、頭、字、の、部、と、云、い、ま、い、ま、と、見、る、と、云、○黄、鳥、

詩、の、子、の、黄、鳥、ハ、今、の、鶯、お、あり、と、云、説、ある、あ、り、人、の、云、

黄、鳥、ハ、俗、に、朝、鮮、鶯、と、云、の、也、其、羽、真、黄、と、云、鳴、の、本、と、云、

鶯、の、琴、

志、詳、疑、ら、く、

鶯、の、琴、

鶯、の、琴、

春、

鶯、の、琴、和、漢、三、才、論、會、其、声、四、滑、み、て、短、く、鳴、時、声

み、隨、て、兩、脚、と、互、み、舉、て、琴、を、彈、手、と、揺、す







將射乎小饗... 射礼  
八賭弓の前十七日... 正月十三日... 射礼の翌  
公事根源... 又射遺... 射礼の翌  
日... 昨日射礼... 四府... 今日射礼...  
射斗

下部古事記 天照太神伊勢国五十鈴川上... 神代  
の人形と字をせり... 鬘斗... 打鮑...  
残雪  
続拾遺 春あま... 風... 山...  
雪 一条前関白

野大根 兼文曰西土の小大根... 兼三春物海  
相州のもも大根是

苔 説文苔水衣水土... 青海苔、甘苔、鶏冠菜、  
潤氣所生在水傍... 於期苔、櫻苔、素麩苔、  
黒海苔、浅草海苔、以上おのゝ頭字の部...  
品川海苔、武州袖の浦... 奥津苔、廣サ六七分長サ  
五寸... 頗る厚... 紫色... 葛西苔、給易、  
出... 十六島苔、雲易... 紫菜... 野遊

春部野遊 都人宿... 野遊  
日... 野遊... 後京極攝政... 野遊...  
川狩の名類... 平夕の雅... 勿論  
て、春秋の三... 例の衆... 長閑  
春の日のユフ  
タリと長く閑

二月 茗葱 時珍曰山原平地... 野人... 食ふ白花... 閑  
と云、  
結ぶ 軒端の梅 部梅 三月 上魚梁 和漢

三才品全魚梁ハ竹筴を左右... 立上廣く下狭く...  
空口... 別小簿と曲く... 籠の如く... 底... 繩を編く  
底... 魚梁の空口... 即ち... 魚流... 隨  
く入... 又筴... 扉の如く... 魚入... 頃...  
障... 出ると... 運... 去ると... 守... 上り梁  
ハ若鮎の川水... 逐下... 梁... 取

正月 元日、元朝  
を部... 保出す、  
三朝 玉燭宝典正月一日為元日... 朱子曰元大也  
始也... 尚書大傳正月一日為歲之朝月

之朝、日之朝、元三  
故曰三朝、三元  
亦三朝同義也  
春 ねく



又元三者三元之轉錄也。鮑宣傳元日歲之始月之始日之始故曰三始。玉燭宝典元日歲之元時之元月之元也。諸司奏故曰三元元始也。元日節會。七曜御曆。

水後國柶奏。滑稽雜談この節會天子紫宸殿。腹赤奏。各部頭字。子渡御ありて群臣百官酒とる。

宴會ありの儀。宴會と書てトヨアカリとる。大さの節會の名も侍も。十月中辰日の豊明節會も限るがが。其式江次第も詳く。

○せつをたつるのやと。この豊の明の。

あるん。日本紀應神天皇十九年冬十月朔。幸吉野官時國樞人來朝之因以。

頭昭。國柶奏。醴酒獻天皇而歌之。延喜式九諸節會吉野の國。

柶御贄と献ト歌曲と奏す。節毎ふ十七人と以て定ト。國柶十二人苗五人但苗三。

二入山城續喜郡。夫國柶八人。甚淳朴。毎小。山果をとり食ふ亦蝦蟇を煮て上味とす。身を毛味。

と名づ。其土京も東南の山を隔て吉野の川上小居。峯峻。谷深。道路狹峨。故小京小遠。

と。いし。來るを希く。以て。其。土毛と献す。其土毛ハ粟苗年魚の類也。近世吉野も參る。絶く。公事根源今の國柶の奏。

歌。吉野。年。始。參。江次券。國柶の歌。苗ハ。承明門の外。苗ハ諸書と考ふる。元日ハ。七日の節會。踏哥の節會五節あり。見。作者心得。但始と以て正し。早。江戸の商家多く。春小許用。元日不開戸。元日と開。一日。廢務。又俗間。家内を掃除。元新年の陽氣。重。事。唐。此事あり。閩部。疏。閩の俗。歳首。重。民。元日草。福壽。畫鶏帖。荆楚。を開。元日草。福壽。畫鶏帖。歳時。

記正月朔日畫鶏と戸上小帖。葦索と其上懸。符。を旁小挿。百。食積。追加の。串抄。和漢三才。鬼。畏。部。金竹の串。小買。乾。西陽雜俎。抄。七絶。あり。一。毒。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。

春。く。







生ト隨<sup>レ</sup>紐<sup>ト</sup>結<sup>テ</sup>形<sup>ハ</sup>微<sup>シ</sup>長<sup>ク</sup>、**草の若葉** 兼文曰  
東の枝の如<sup>ク</sup>、其根<sup>ハ</sup>地骨<sup>ト</sup>云、  
法の書に正月の節に若草新草初草と  
出せり、又二月の節に草の若葉を稍長<sup>ク</sup>と  
春草を弱草、**熊谷櫻** 天和本草言<sup>フ</sup>、  
又芳草と云、  
櫻<sup>ハ</sup>八重の好花<sup>ト</sup>、櫻の光登<sup>ニ</sup>、花色白<sup>ク</sup>、  
小紅<sup>ク</sup>、帯<sup>ハ</sup>、按<sup>ル</sup>源平の合戦に熊谷次郎直実根<sup>レ</sup>、  
谷の光登<sup>ニ</sup>、名<sup>ハ</sup>形<sup>ハ</sup>、平家物語に記<sup>ス</sup>、  
以種余種の櫻<sup>ハ</sup>魁<sup>ト</sup>、是<sup>ト</sup>熊谷櫻<sup>ト</sup>云、  
**三月**

**草餅** 蓬餅<sup>部</sup>二月始生<sup>ス</sup>、莖葉白<sup>ク</sup>、  
三月三日婦女  
こま<sup>ト</sup>、**林**、**持**、**傳**、**歳事**、  
と云、**武輪**ハはの部、こまの条可見<sup>ル</sup>、  
**朗詠注**真林寺月輪院<sup>ノ</sup>行<sup>ハ</sup>、天台の大衆法華<sup>ト</sup>誦<sup>ス</sup>、  
典の儒<sup>ニ</sup>詩聯句<sup>ト</sup>成<sup>リ</sup>、東保年中に大内記保胤狂言詩語  
の罪<sup>ト</sup>、**勸学院**ハ三条の北今の雀の森<sup>ト</sup>、  
五日毎<sup>ニ</sup>行<sup>ハ</sup>、**侍**、**勸学院**ハ三条の北今の雀の森<sup>ト</sup>、

跡<sup>ハ</sup>、**鞍馬の雲珠櫻** 神抄唐鞍の雲珠<sup>ハ</sup>似<sup>ク</sup>、  
隨風鳥<sup>ハ</sup>雲<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>、**雲入鳥** 朗詠  
と云、**汲**、**葉子**、  
此虫<sup>ハ</sup>育<sup>ハ</sup>始<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>葉<sup>ト</sup>、  
以<sup>テ</sup>、**九輪草**、  
畧大<sup>ニ</sup>壺<sup>ノ</sup>田<sup>ハ</sup>八<sup>ノ</sup>種<sup>ト</sup>、  
稍<sup>シ</sup>至<sup>リ</sup>七<sup>層</sup>或<sup>ハ</sup>九<sup>層</sup>浮<sup>圓</sup>の丸輪<sup>ハ</sup>似<sup>ク</sup>、  
稍<sup>シ</sup>至<sup>リ</sup>七<sup>層</sup>或<sup>ハ</sup>九<sup>層</sup>浮<sup>圓</sup>の丸輪<sup>ハ</sup>似<sup>ク</sup>、  
**暮春**、  
**正月**

**藪入** 六の 紀事正月十六日農工商おの<sup>レ</sup>遠遊<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十  
六日遊<sup>ビ</sup>、又藪入<sup>ト</sup>稱<sup>ス</sup>、  
と云、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、

と云、大和の民間<sup>ニ</sup>、旧年嫁<sup>ハ</sup>、  
餅<sup>ト</sup>卷<sup>テ</sup>祝<sup>ス</sup>、是<sup>ト</sup>十六餅<sup>ト</sup>、  
混雜<sup>シ</sup>、**厄神詣**、  
又江戸<sup>ノ</sup>八宿<sup>ハ</sup>お<sup>シ</sup>、















松むし、松むし、その下略あり、**夫木**、**馬**、**寂蓮**

陳威器曰、煙、海泥中、生亦、長、二、**三月**、**眉作**

花、**正月**、**雞旦**、**東方朔白書**、**歲**、**後**、**八日**、**一日**、**為**

雞、**外記政始**、**公事根源**、**是**、**吉日**

七日と人日といふは、**外記政始**、**吉日**

先九日あるを、上卿以下位次の公卿あり、**外記**

宰相廳、**外記政始**、**吉日**

事、**外記政始**、**吉日**

南の所、**外記政始**、**吉日**

八恒例臨時の政、**外記政始**、**吉日**

當年の政と行ひ始むる、**外記政始**、**吉日**

日、**外記政始**、**吉日**

左衛門、**外記政始**、**吉日**

府、**外記政始**、**吉日**

**削掛挿**、**外記政始**、**吉日**

殿、**外記政始**、**吉日**

此遺意、**外記政始**、**吉日**

家毎、**外記政始**、**吉日**

け、**外記政始**、**吉日**

帽、**外記政始**、**吉日**

ハ、**外記政始**、**吉日**

有故、**外記政始**、**吉日**

馬

眉作

東方朔白書

公事根源

外記政始

吉日

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

夫木

寂蓮

海泥

生亦

長

二

三月

眉作

正月

雞旦

東方朔

白書

歲

後

八日

一日

為

外記

政始

吉日

外記

外記

松むし、松むし、その下略あり、**夫木**、**馬**、**寂蓮**

陳威器曰、煙、海泥中、生亦、長、二、**三月**、**眉作**

花、**正月**、**雞旦**、**東方朔白書**、**歲**、**後**、**八日**、**一日**、**為**

雞、**外記政始**、**公事根源**、**是**、**吉日**

七日と人日といふは、**外記政始**、**吉日**

先九日あるを、上卿以下位次の公卿あり、**外記**

宰相廳、**外記政始**、**吉日**

事、**外記政始**、**吉日**

南の所、**外記政始**、**吉日**

八恒例臨時の政、**外記政始**、**吉日**

當年の政と行ひ始むる、**外記政始**、**吉日**

日、**外記政始**、**吉日**

左衛門、**外記政始**、**吉日**

府、**外記政始**、**吉日**

**削掛挿**、**外記政始**、**吉日**

殿、**外記政始**、**吉日**

此遺意、**外記政始**、**吉日**

家毎、**外記政始**、**吉日**

け、**外記政始**、**吉日**

帽、**外記政始**、**吉日**

ハ、**外記政始**、**吉日**

有故、**外記政始**、**吉日**

馬

眉作

東方朔白書

公事根源

外記政始

吉日

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記

外記







と除く心ちるし一説に福沸、福鍋紀事云若水と

賀客と送迎の爲ともなり福沸と云ふは福とハ餅の異

雑談抄谷七日の粥を呼ぶ福沸と云ふは福とハ餅の異

名なり其故ハ古へ福引と云ふ餅と二人して引合ことなり

粥和と云ふ其う餅の異名と福生果といふは今朝餅と

煮熟和と云ふは餅の異名と福生果といふは今朝餅と

の糸 路和 本朝食鑑 冬十一月宿根花と関く正二

月最盛く初め地と出る時小蓮の如く其

蒼漸くむらぐ普黄あり外ハ紫華ありと云ふこと一

二すす小蓮の如く花開ると重々として臺と云ふ俗

小露の臺と号す相重る貌と云ふ貞享式 中古の式目ハ

露のさふも露の花を同く春を用ひられ此名ハ例の賞玩ハ

む消の雪をむむと云ふ露のさふハ冬と定むべし

露花ハ漢ハ貫鳥ハ春雪の詩と云ふ春といふ人も宜む

その名ハさうて俳諧の用あり但し露の芽ハ

春といふ一物二用の例といふべきなり

兼三春物

鮎膾

大和本草 膳夫録云膾ハ鮎ハ先ちハ卵し膾

魚の卵とす 紀事 正月ハ三月ハ至る迄専ら江

江の鮎魚を鮎と源五郎卿と云傳へ漁人源五郎始てこ

すといふ其大ちりとの鮎鮎と称す

截て膾とすも堪らる京近江の人専賞之

二月二日 紀事 二月二日男女おのく点灸すこと二日やいと云中

華の書ハ八月朔日針灸ありと云ふこと誤て二日と

用るを八月二日も云同く和俗大人小兒おのく点灸す

是と云ふ二月 鞆 鞆のこ

やいと云ふ三月 桃

花單 普賢象櫻

横川詩序 普賢堂ハ天下才一あり

世傳云鎌倉小堂あり普賢こ

を安ん其地ハ櫻を俗ハ普賢堂と云或ハ普賢象といふ

和訓鼻と花と音同ト花の白くちてわつ天あるとの菩薩

の衆と云ふの白象の鼻 藤 大和本草 花春の末ハ四月

の如しと西説と云ふ是なり

充る花瓶ハ花と云ふ酒と加ふ見ハ久しく茶と云ハ本

艸ハ散酒の中はことと用むハ正一と互相助と云如吹

春

ふ



藤波 藻塩草 波を似る藤波 藤枝 若紫十

藤蔓 玉吟 ちりちりかきくさや

藤櫛 来の木 藤

藤網 藤ふらふら合さし

藤九 装束の青藍曰藤經藤九藤瘤の類

正月 曆 閏

去年 今年

小松引 同上 初子の糸を出す

昆布 和漢三才圖會 其大なるもの

小殿原 た部田作の糸を出す

江梅 俗云野梅其花單葉小白

板 このこは部羽子板の糸出す

文木 梅花と云晋の哀帝書と云時四時をさふ随く

この花 あまのつらやこの花冬をこ

御齋會 御齋會

公事根源 是ハ太極殿也ハ日々十四日

御齋會内論義 日ハ御齋會の結願

春

御齋會 御齋會

御齋會 御齋會

御齋會 御齋會

御齋會 御齋會



同者講師を多て御前より論義まじへ内論義し  
又天長十年正月廿四日延暦寺の僧田澄をりて論義  
ありとこころり是ら  
や事の起り  
**木の芽**  
万木の芽立ちあり  
説文芽萌芽也  
兼三

**春物黄鳥**  
詩經綿鴛黄鳥又云出自幽谷  
迂喬木より部鶯の余出併せしむ

**駒鳥**  
和漢三才圖會正字未詳其声高滑なり長滑し  
ヒシカラカラと云々如く走馬の響と云々如く其頭  
毎左右子振り走馬の形勢子似ふ故駒鳥と名づく  
春夏より啼く大和本草形ハ鶯に似く大ニハ百舌鳥や  
と云身ハ淡黒頭ハ白の  
廻り紅褐色あり

**九霞**  
か部霞  
東風  
爾雅東風謂之谷風注谷風五穀養育意也春  
暗而風曰光風万葉注東風越の俗安由乃可是  
と云東風痛久吹良之奈吳乃安麻乃  
都利須流乎布称播可久流見由家持  
白揚丸葉柳と云その皮と剥バ痛あり  
肌の如し故子名づく多揚枝と云もの是く

**二月事**  
始 針供養 八日 〇武江の俗二月八日を事納と十二  
六質汁 月八日と事始と云々竹竿の先ハ  
目笠とつけて家ハ軒下又牛房芋六根赤小豆ホの六種  
を煮汁と云々六質汁と名づく婦人ハ針の扱  
と云集りて淡島の社へ納め一日糸針の業ハ停む是  
を針供養と云其由来ハ詳しハ十二月八日と事納  
嘉祝の事ハ多と云二月八日と事納と云ハ  
近世の誤也冬のこの部事納の条も云々

**水葱摘**  
本草水旁ハ生す葉沢瀉より小く花青白色蒸す  
吟ふ堪ふ大和本草浮菖蒲三才圖會其圖ハ書葉  
花沢枯梗ハ水沢ハ生す葉厚くく慈姑に似た  
夏秋紫碧花と開く水葵と云沢枯梗と云々

**紅梅**  
范成大梅譜紅梅花色杏の  
如し色淡紅実扁なり  
**寄居虫**  
和漢  
図全文蛤鳥蛤ホの殻の間ハ寓生す形小ハ蟹に似く  
白色碁石より小なり身柔軟蓋ハ寄生木と相  
類ハ長明方丈記からハ  
ハチハミと貝をこのむ

**三月**  
小弓引 著聞集  
延長五

春 二



年四月彈正親王内裡より小弓をたのむる酒宴果てた

みうりて清涼殿の東の箱より又小弓の勝負をた

考揚弓雀小弓と類して二物ともよふ公家小玩

御燈

公事根源是八天子の北斗の灯明と奉りて昔北山

小梅の花

和漢三才圖會庭梅正字最字高三四尺花と開く形梅

似て小白色より紅色と帯ふ花黄みして甚繁く艶美

花落て葉生ず狭く長く庭櫻の葉に似て尖と結ぶ櫻桃

小梅と庭梅

護花鈴

辛夷

筆正二月開花落て実あり

夫木

の葉似て紫の苞紅焰あり又白花のものあり小幣の如

小幣

和漢三才圖會糯米ハ小樹叢生す高サ

三二尺葉狭く長く薄し縦理あり二三月

近

白花と似て大サ錢より蒸る糲の如く故小俗呼

小尖花

小粉團花

粉團花

俗小粉團花と云

高麗菊

一名憂忘櫻と云江戸渋谷八幡の社地

小點

子

登飼

登飼

棚

神の糸

夷廻

夷祭

籠梅

枝と折る籠

春元

六十



兼三春物 繪踏 吾山遺稿 肥前長崎五島大村平戸此

と禁せり 二月 越中梅 大花あり白く淡紅と帯ふ

豊後梅に似たり九八重の花

元亨 資治表曰 延久皇帝 二年冬十

二月廿六日 四宗寺成る 帝寺に幸して 親ら法事とて

落慶の寺 仁和寺の南ありし 莊嚴都下を冠し 江次第

四宗寺 宸勝会 二月十六日 今寺跡絶

御室仁和寺の境内に其名ありしなり 三月 江戸桃

け部 涼平 江戸櫻 選櫻 葉少 赤く花大輪

挑の条に云 江戸櫻 莖長く下りたるこの種 関東ニ多キ

故に名と 右衛門櫻 江戸四谷拍木村 延正寺 宗師堂

すといふ 昔武田右五門と云ふもの此

櫻と愛せ 當に拍木村あり 右五門が愛せり 是より

を後人源氏物語の拍木の右五門に假借し 名づくとも

和漢三才圖會 今多く庭園に植る 其花と愛

化偷草 亦冬爛子 葉車前子に似たり 厚く長し

地不布て生ず 三四月莖を抽て 花を紅く 紅色或ハ淡黄

或ハ柳色 敷色あり 其根 似たり

愛宕寺の牛王加持 清水坂の西あり 今日夜入り 弦指客

殿あり 南北二行の座あり 宴飲 其座上あり 人

片木を以て立舞ふ 是と天狗酒と云ふ 博供酒盛

其鉢 麻豪あり 故に其音と云ふ 天狗酒盛 宴終

のち各堂に登り 牛王杖と云ふ 大い門扉或ハ床壁と設け 又

法螺と吹太鼓をもち 其間を寺僧 牛王と貼す 是を思

をさすの謂 雑談 天狗酒盛 東西の座と設け 互に脊の

高き人を牛と勝 天穿 煎餅と繫 事文類聚 江東俗

負を争ふなり 正月七日を号して天

穿と云 紅縷を以て煎餅餅を繫

三月 田鼠化 月令 季春之月 田鼠化 為 駕 行義

本州 履脚 短く 僅に能行 こと 長す 詩

目極く 小く 頂衣短く 最取 或ハ竹弓と安て 射て 取

鷹 小飼 夏小正 三月 田鼠化 鷹 八月 駕化 田

春 七



正月 縣召除目 十日 年中行事哥合云

諸の外官と宗と任せらるる外官は諸国の司と侍入田舎と

田舎の官と宗と任せらるる公事根源名替、名因替、秩、職、更任、任符、返上を申文のり、數を不知、おぼしこの除目あつて、可知事、八十一年の字、百大の

紙、書、美花抄春、秋、白馬

節會 七日 公事根源 正月七日、青馬と、年中の邪氣

正月豊樂殿、青馬七足を用ゐり、又青馬と

春の色、白、青、馬、白馬

あまき、小豆粥、風記正

月十五日小豆粥と煮、天狗の為、庭中案、祭、則

其粥凝る時、東方に向、再拜、長跪、服、年と終

粥未、杖、か部の、あまき、礫の

改、新年、雪玉集、あまき、光

沫雪、秋日本紀、雪之脆、弱者如水沫、故曰沫雪

淡雪、冬、見、閑居の中、二十哥仙、春、考

ら、二十哥仙、絶、可、惜、考、此、今、式、此、皆、誤

年、甲戌、六月、芭蕉庵、挑、青、判、と、云、十六、字、と、卷、末、補、八、翁、の

らん、支、考、の、作、ら、る、と、ハ、卷、中、の、文、体、も、明、白、と、云、頭、跋

春 あ



後ハ支考ガ偽作ヲモウツルハカキ書ト本々見テ其ノ誤  
 り多ク、曠野集雪二十句の中ハ、あはれくや 氷雪うら 酒さけ  
 飯いひ 荷か 号ごう、又冬ノ部ニハ、雪ゆきノとハ、あはれ 消しょう 兼兼  
 又良、集集、あはれ 軍軍ノ大事大事、あはれ 氷氷 氣氣ノ雪雪ニ雅  
 誤誤、あはれ 明明、あはれ 籠籠 挑挑 灯灯ト云々、あはれ 付付、あはれ  
 是ハ前後ニ句句ハ、あはれ 雅雅 也、あはれ 氷氷 雪雪ハ、あはれ 冬冬 季季ト云々、あはれ 句句、あはれ  
 捨捨、あはれ 又支考ノ著著、あはれ 貞貞 享享 式式、あはれ 氷氷 雪雪、  
 この名ハ大昔ハ春春トシ、中昔ハ冬冬トシ、今按今按、あはれ 氷氷 雪雪ハ、あはれ  
 子用子用トシ、所以所以、あはれ 雪雪ノあはれ 班班、あはれ 形形 容容ハ、あはれ 初初 雪雪トシ、あはれ 薄薄 雪雪ト  
 云々、あはれ 春春ノ雪雪ノ平平 白白トシ、あはれ 日日 影影、あはれ ちち ちち ちち 氷氷 雪雪ト云々、あはれ  
 寒寒 氣氣ノあはれ 多多 故故、あはれ 氷氷 雪雪ハ、あはれ 春春トシ、あはれ 春春トシ、あはれ  
 此ハ例例ノ加加 減減トシ、例例ノ當當 用用トシ、あはれ 又同又同 人人ノ著著、  
 六五ノ余余ニ云云、あはれ 氷氷 雪雪ハ、あはれ 春春 季季ト云々、あはれ 傳傳 新新 古古ノ法法 式式、  
 何何ノあはれ 春春 季季ト云々、あはれ 支支 考考ガ説説、あはれ 翁翁 存存 在在、  
 今ハ冬冬 季季ト用用、あはれ 上上 舉舉、あはれ 今今 集集、あはれ 依依 集集ノ句句、  
 今今 支支 考考、あはれ 中中 古古ニ皆皆 氷氷 雪雪ト云々、あはれ 氷氷 雪雪ハ、あはれ  
 の假假 名名、あはれ 氷氷 雪雪ハ、あはれ 古古 事事 記記、あはれ 万万 葉葉、あはれ 阿阿 和和 由由 伎伎ト云々、あはれ 氷氷 雪雪ハ、  
 雪雪ト云々、あはれ 氷氷 雪雪ト云々、あはれ 假假 字字ト云々、あはれ 假假 字字ト云々、あはれ 假假 字字ト云々、

葭灰飛

歲時記、春、取竹、為管、葭、灰、以  
 飛、而、管、通、は、部、万、春、を、部、鳴  
 以、心、不、律、鳥、狩、の  
 兼、三、春、物、音、柳、鳥、狩、の

青柳

和漢三才圖會、正字未詳、俗云阿利加比  
 出、其、形、色、蛤、蚶、に、似、く、小、し、其、大、者、も、一、寸、  
 小、キ、と、の、四、五、分、反、白、色、也、紫、斑、黑、斑、花、紋、の、華、也、也、也、  
 皆、  
 あり、攝、泉、播、の、三、州、  
 希、東、海、ニ、極、多、  
 其、腸、中

兼三春物

音柳、時、珍、曰、春、の、初、る、葉、葉、  
 珠、と、出、  
 即、ち、黃、蕊、花、を

青芬

本朝食、本、朝食、  
 暖、又、ぬ、く、  
 ぬ、く、

青海苔

和漢三才圖會、乾苔、海、と、澤、と、兩、品、  
 異、多、く、南、海、ニ、出、  
 伊、勢、の、産、と、勝、  
 甘、海、苔、崔、禹、金、  
 春、あ、



菜々り紫の帛の如く、疑く石上を生ず、その三四種あり、紫  
色を以て勝まん、俗に、**武江品川の青饅**  
呼ぶ、**神仙菜**といふ、**浅草海苔**、**海辺**にて採

和菓、**四会**、**林の葉音**と醋ふ合せ、**魚膽**を和く、**こぼし**と食  
ふ、俗に**阿乎**

**二月 藍蒔**

**蕪頌四經**、**藍**、**人**、**家**、**蔬圃**、  
畦と作り種、**三月二至**

乃太、**麻蒔**、**麻**、**早春**、**種**、**春**、**麻子**、**毒**  
と生、**晩春**、**種**、**秋**、**麻子**、**菜**、**入**、**佳**、**也**

**胡葱**、**時珍**曰、**八月**、**種**、**下**、**菜**、**葱**、**似**、**根**、**蒜**、**苗**  
似、**其味**、**葱**、**の如**、**く**、**臭**、**わ**、**る**、**乎**、**苗**

**時珍**曰、**苗**、**八**、**翼**、**と**、**以**、**て**、**鳴**、**乎**、**大輪**、**八重**、**色**、**八**

**三月 浅葱櫻**

**櫻**、**の**、**異**、**名**、**八**、**重**、**色**、**八**

**淡**、**音**、**み**、**く**、**白**、**色**、**と**、**あ**、**ら**、**草**、**櫻**、**の**、**異**、**名**、**八**、**重**、**色**、**八**

**踏青**、**都**、**飲**、**踏**、**青**、**〇**、**三**、**月**、**三**、**日**、**山**、**野**、**中**、**臣**、**と**、**る**、**の**、**過**、**ち**、**も**、**武**、**蔵**

**栗津祭**、**江**、**州**、**栗**、**津**、**祭**、**八**、**鳥**、**々**、**川**、**の**、**御**、**霊**、**の**、**祭**、**礼**、**古**、**三**、**月**、**三**、**日**、**の**、**祭**、**あり**、**し**、**が**、**今**、**民**、**衆**

**浅草祭**、**十八**、**日**、**〇**、**人**、**皇**、**三**、**十**、**四**、**代**、**推**、**古**、**天**、**皇**、**の**、**御**

**主人**、**の**、**孫**、**と**、**ま**、**い**、**ま**、**中**、**目**、**住**、**住**、**漁**、**と**、**世**、**と**、**す**、**時**、**推**

**古**、**帝**、**三**、**十**、**六**、**年**、**三**、**月**、**十**、**八**、**日**、**件**、**の**、**三**、**人**、**官**、**戸**、**川**、**の**、**沖**、**網**、**と**、**下**、**す**、**に**、**あ**

**結**、**ひ**、**く**、**堂**、**と**、**祈**、**り**、**の**、**灵**、**像**、**と**、**も**、**今**、**の**、**浅**、**草**、**寺**、**觀**、**世**、**音**、**是**、**ら**、**し**、**三**、**社**、**権**

**現**、**の**、**祭**、**、**、**先**、**ッ**、**祭**、**の**、**前**、**日**、**三**、**社**、**の**、**神**、**興**、**三**、**基**、**と**、**本**、**堂**、**と**、**移**、**、**、**堂**、**前**

**並**、**木**、**町**、**と**、**過**、**ぎ**、**觀**、**音**、**の**、**境**、**内**、**に**、**入**、**る**、**神**、**興**、**の**、**前**、**に**、**の**、**藝**、**を**

**施**、**し**、**、**、**隨**、**身**、**門**、**を**、**出**、**し**、**件**、**の**、**邊**、**物**、**離**、**子**、**を**、**渡**、**り**、**畢**、**、**、**神**、**興**、**三**、**基**

**本**、**堂**、**と**、**出**、**、**、**氏**、**子**、**の**、**町**、**と**、**渡**、**御**、**浅**、**草**、**御**、**門**、**の**、**外**、**に**、**至**、**、**、**神**

**興**、**と**、**船**、**ふ**、**、**、**浅**、**草**、**川**、**を**、**漕**、**上**、**り**、**一**、**の**、**権**、**現**、**へ**、**上**、**、**、**奉**、**、**、**今**、**日**、**の**、**船**

**八**、**品**、**川**、**の**、**西**、**大**、**森**、**村**、**の**、**漁**、**人**、**祭**、**礼**、**毎**、**年**、**出**、**す**、**、**、**是**、**往**、**古**、**官**、**戸**、**川**、**に**、**在**

**一**、**漁**、**人**、**の**、**後**、**、**、**大**、**森**、**を**、**移**、**り**、**と**、**以**、**て**、**今**、**日**、**の**、**古**、**と**、**忘**、**る**、**遺**

**春**、**あ**

**春**、**あ**



意ハ神典ハハル陸地を本堂還御今日浅草雷神  
門の辺に葦と賣る。和名加良毛。天和本草  
と云ふ。浅草の表市云。杏花 其花は唐音と  
呼ぶ。一種花紅く八重き俗に六代と名く  
其木のく時花と見らる。長く切。馬酔木の  
平重盛の孫六代年長。故に名也。

花 和漢三才圖金山谷ニ生ズ高さとの二三丈小ハ二尺  
枝葉茂盛す其葉狭く長く鋸の如き齒を  
浅緑色硬く枝極まの生ト花芽と出。春小白花  
を開き房と作す子と結ぶも亦房を子の中細子  
多し四時凋す相傳ふ馬此葉 刺 眉作の花蘗頰  
をくく酔ふ故に名づく。四月ニ月 四月ニ月  
苗と生ト二三寸の時根と併。葉と似て甚美  
四月高と尺餘刺多し。心中に花頭を生す紅藍花の如  
青紫色心北人呼ぶ千針草と云。多識篇 大薊 於尔安左  
除。此花婦人の眉拂の形の如し故に眉作の花と云。大薊ハ  
鬼の眉 通草花 天和本草 木通ハ蔓州ハ蔓即ち  
拂と云。木通兼堂と通草と云。鞍馬の木

芽漬ハ通草ハ葉ハ五葉ハ分る三月紫花を開く  
花の容ニツツと秋円と子をむきまく 東薊  
其葉初生ハ蒲公英の葉に似く鋸齒あり稍長ト車前  
草の葉の如し莖を抽んす六七寸小葉五莖の頭ハ  
花と似く一莖一花形菊の花に似く色淡碧色黄心あり  
も單葉ハ久細瓣重り咲けり單葉の状を三四月  
関東の曠野の路傍 鮎子 小鮎 汲鮎 雀島錫食  
小住ハ此と云ふ。若鮎 經鮎 鱒  
似く小く白皮ナク鱗あり春生き夏長ト秋衰ハ冬  
死す故に年魚と云。和漢三才圖會 二三月の初江海の交ふ  
在く大ハ二寸つ小ハ鱗骨と生す潔白く黒眼と云  
の呼ぶ小鮎吾鱒と云。本朝食鑑 鮎と長を。時  
小網を以て魚をとる或ハ二夫長繩と云り繩の上重  
と云ひ小石塊と云り相曳く小石川と下る時ハ鮎  
石声おとらして落ッ夫下流お立ち扇網と持く二  
夫の至ると待つ二夫迫つておさふ相依り結び合す  
如く團様す。鮎ハ鮎扇網ハ半網と奉小拘と持  
鮎と汲是と汲鮎と云。紀事 大井川ハ木柄と云り鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎

春 鮎



正月 歳旦開

正月吉辰とて、ひく連哥俳諧

取らざるを汲鮎ひくと云ふ。此の歳旦とハ、歳首賀詞の發句と云歳旦の句と云ヤシ、

藁盒子わらこの幸木さいふぎとハ、按るハ、藁杖わらづえのこゝに北國きたくにより幸木

よりの女の腰こしにうつを、又門松かどまつの根ねに立る木たてるきと云ふ

いふ木いふきと云、藁盒子わらこハ、盒子このこゝにあきて、門松かどまつの

つけ、供物くぶつとこの内うちへ備まもつ、幸籠さいろうもこのこゝに

綵燕さいえん 春燕はるえんと戴かく 荆楚しやうそ歳時記さいじ 立春りっしゆんの日ひ、綵さいと剪きり燕えん

門かどハ、部べ開ひら牛うし、左義長さぎやう、

爆竹ばくちやく、吉書揚きちしやう、吉書きちしやう、徒然草とねんそう 左義長さぎやうハ、正月しょうげつハ、打うちらるる

焼やく、法成ほふせい就しゆの池いけと云ふ、神泉しんせん苑えんの池いけと云ふ、

和漢わくわん才圖さいと全ぜん正月しょうげつ十五じふご清涼せいりやう殿てんの庭にわに於おけ、青竹せいしやくと焼やく、以もつ

吉書きちしやうと天あまより十八じふはち日ひと亦また竹たけと飾かざり、摺扇すりあふを結むすぶ、清涼せいりやう

殿てんの庭にわに於おけ、唱文なげふみ師し大黒おほくろ松まつ大夫だふ其その徒と人にん

舞まひ、又また如ごとく、童子どうしニ入いる素面すおもてと云ふ、亦また熊くまの鬚すげと云ふ、腰鼓こしづと云

ふ、又また如ごとく、肩衣かみえ袴はかまと云ふ、五人ごにん雙ふたの立たち、推おし

かんと云ふ、摺袴すりはかまと云ふ者もの一人ひとり声こゑと和わせ、又また如ごとく、其その

来由きゆうと云ふ、歳時記さいじ 元日げんじつ庭前てんぜんを竹たけと爆はくす山さん臊そうと云ふ、事こと

文類聚ぶんるい 爆竹ばくちやくハ、神異しんい經きやう云いふ、西方さいほう深山しんさんの中なかに人ひとも長尺ちやうしやく余あまり、と犯ひ

一ひと寒熱かんねつを病やまひ、名なづけ、山臊さんそうと云ふ、竹たけと云ふ、大おほ中ちゆうハ、昔むかし、

あつ、山臊さんそう驚おどき、悼なげむ、紀事きじ 洛中らくちゆう家け今いま疏す爆竹ばくちやくす、其その焦こ

あつ、竹たけと廁せうの内うちに、其その家け疫えきあり、或あるハ

丸義長まるぎやうの火ひゆ、既すでに、食たべ、是こゝと菱あやの籠かごと云ふ、

この火ひを以もつ、今朝けさの朝あさと云ふ、或あるハ、漢明帝わんめい正月しょうげつ十五じふご日にち、佛經ぶつぎやう道

書の勝劣しょうりやくを試こむ、遺風いふう也なり、是こゝに、其その儀ぎ式しき淨園じやうえんの

事ことの拘こ、守まもらる、附会ふかいの説せつ、凡たゞ民たみ同どう十五じふご日にちの朝あさ、其その家けの飾かざ

藁松竹わらまつたけと取とり、一ひと処ところ子こ集ありて、燒やく、止とまり、止とまり、兒童こどもの試こ、筆

の書かきと天あまより、武江ぶかうとハ、官禁くわんきんあり、爆竹ばくちやくを、御ご全ぜん花

の形かたち造つく、猿さる、紀事きじ 九京くきやう師し猿さると舞ます、其その六む人にんあり、春

俗担しやくたんと猿さる、又また云いふ、猿さる、亦また繩なわ

春 六



と高貴の家を献す或は猿を舞して祝の候  
是馬摺神と云馬の神を奉る

互廣讀 表疑也 部の疑  
兼三春物 佐保姫

岷江入楚 春は佐保山の神より事ありて、山の愛の色  
春と添ふ神といふ秋は立田山の神より事ありて、紅葉と葉

故に秋と添ふ神と云く、貞徳曰佐保姫立田姫と云、唐は  
造化の神と名づけり、春秋の花と云と造りて神と云と日本

は春の造化の神といふ、秋の神は立田姫と名づけり、  
神祇の神といふ、佐保姫と名づけりて、其の事、あまの

姫といふ、姿のあまのふゆと作りて、衣は手ももたぬ、実  
体もあまの衣類、佐保姫の衣類

佐保姫の衣 新式 佐保姫の衣類  
あまの霞花といふ

櫻海苔 大和本草 壹岐の島海岸に産す其色  
紅白櫻の花の似たり行々相傳 酢漬にて

是と 春月盛ふ出故、山椒の皮 本朝食鑑 椒樹の  
食入、俗、難の字を用ひ、皮外面、粗皺に削

て去る用ゆ、二月 西行忌 十五日 西行法師ハ左金吾藤  
原の康清次男、俗名

ハ儀清、鳥羽院の上北面、徳大寺家の被管より弓馬奇道  
の達人、保延三年薙髪して大実坊四位と号す、隱逸傳

西行曰和哥ハ禅定の修行、吾和哥より佛法と云と  
と、常ハ仏涅槃の目、花の下に於て死んるを願ふ哥ハ

後、は花のりて春死んるを願ふ哥ハ  
是月、是月、昇く建久九年二月十五日卒す、嵯峨の

柱炬 十五日 紀事 二月十五日清涼寺釈迦堂の前、大炬、西基  
と建暮及び火を点し、地丁人各炬をめぐり、

除障の号と唱へ、歌を繋ぐ踊る、是西域より釈迦と云  
の遺意、世座論梅 中花浅紅千葉、其枝毎四五顆

あり、柱炬と云、長きより随て揺落すこと、坐と論  
如、櫻梅 中花浅紅八重、さくらつばき

名、其萌、さくらつばき、長きより随て揺落すこと、坐と論  
云、〇ハ部、虎杖の葉と

三月 嵯峨大念佛 紀事 九日  
九合を、意得を、ハ十五日

春 さ











御慶 年の始の祝詞への長松の  
親の名で來る御慶は野坂

着衣始 李吟曰衣と着初る祝  
三日の内吉日とも云

毬打 萬葉集 正月 教王于及諸臣于等集於春日野而作打  
毬之樂 福中 毬十節録云 黃帝蚩尤之頭を以て毬とす 今  
の毬杖は彼例を以て漢土年の始に作ること用の國中  
凶事なり 仍て日本國の例を學びて毬杖を以てし 醒倉

骨董集 正月 男童のころあつた毬杖へて打毬の愛風あり  
一打毬 馬上武事とあつた骨董集に和漢に云ふその未  
こ久しき又毬杖は竹の形に杖玉を以てし  
木と云ふは玉のころあつた打毬は其間九十間  
或ハ十二間と云ふ其半地上をもちて打毬は男兒  
双方を以てし玉と地上をあげあつた一方より推して  
ちよびしころあつた限のころあつた玉のころあつた  
と投るころあつた打毬は玉のころあつた限の  
ころあつた玉と云ふ骨董集に玉のころあつた玉と  
云ふ双方を以てし玉と地上をあげあつた一方より推して

も京師へ玉打と其あつたころあつた昔のころあつた毬杖  
の推はらひた竹杖箒のころあつた玉と云ふころあつたのころあつた

同上 ぶくくの名ハ古き書より見あつたころあつた昔造り始  
ころあつたころあつた毬杖と同物とすころあつた元來別物に  
本草啓蒙云 碌碡ハ田器の形如く六稜あり而頭ハ  
索あり上と云ふ地面を平らにする具也三才圖會 投時  
考ハ玉を載す本邦正月兒戯のぶくくハこの形も象に  
今この説より推して正月男兒ぶくくを以てあつたころあつたハ  
年の始ハ農業のまねびと云ふ農事とすころあつた意あつたころあつた  
吉画を以てぶくくハ紐と云ふ地上を引いて多く画けり  
是田畑の地面を平らにするのまねびあつたころあつた今八年始の祝の  
ころあつたころあつたの何の所用もあつたころあつたの毬杖  
ころあつたころあつたころあつた骨董集

吉書揚 長の書出  
御忌 東山華頂

行幸梅 繪吉梅 大花紅梅 千  
葉二名一物 御忌 東山華頂

山智恩院大智寺淨土宗惣本山正月十八日より廿五日に至り  
一七日晝夜別行法事と修す廿五日を以て正日とす是法然上人  
奉







蔵人三人役之捧物行香ホの身及悉記しは、祇園御八講

定まらば宗別院の時勅会を行はせりや、今も社内にお懸念

大師の像と安置北五日菅家長昔記言

遺跡分明北五日菅家長昔記言

の祖父清公建東寺の西南に在り、加賀國富墓の在、古より

主あり荒廢の地、三、宣言とて請り、神領に施入せり、永く

法花八講の料所とす、公事根源二月廿五日、天満大自在天

神のまありしり、御日、夢のつげ、天仁二年より吉祥

院あり八講あり、菅家の

北野御忌日北五日○北米種の

北野社、山城國葛野郡あり、紀事今夜西京御供田と預る

の家、大小の御供を北野の社に献す、官司老火相迎へたり、立て

警殿より神前の階下に至り、手毎ふりて傳へ、官司の一老と

巫女の文字とあらはし、是を取て神前供へ、是と手供とらひ、

又轉供とて、或ハ菜種の御供と称す、供物の上ハ菜花と挿む、

故ふあらは、或ハ歳ありて菜花とて、開ふ意ハ梅花と挿む、

本寺御讀經江次第頭書春秋二季、百僧と南殿に請り、

大般若經を讀し、其内御前僧九口と定む、

御殿に於て仁王經を讀し、納言參詣各一人南殿に着て

事と行ふ、自餘ハ御殿に候す、貞觀御時毎季、事と行ふ

元慶の天皇踐祚之後、二季ハ修之、公事根源二月八月大般

若經とて、講せり、四ヶ日のことあり、行祭とて僧二

祭とのことあり、天平元年四月八日ハ

菊若葉本草初

布て細苗を生ず、是ハ宿根より生ずること、又種子を

立春より下ス、二月警蟄の前種く始り、井と出、二候に經て

兼始て

三月經供養二日○掃部天王寺、太子堂

音、三月二日經供養と修ス、太子夢殿の經供養、是ハ寺説

云、今日未の下尅、聖霊院の白洲ありて、經供養、宝華

を宝殿の西に出御り、奉り、衆僧諸役人着坐、寺僧惣

礼、回向、次ハ舞樂あり、其外

二月十五日ハお初羽觴と飛子

曲水宴流觴、巴字盃

荆楚歳時記、三月三日、四民水消お並び出、流觴、曲水の

飲をす、公事根源、王卿を奉りて、御前あり

詩と作り、講せり、御溝水ハ盃をとりて、文人

春











此寺の普賢像の櫻より、普賢堂の櫻と、閻魔堂の前の九千本釈迦堂念仏と、文永年中如論上人を始とす。其の末、惠心僧都の高弟定覚上人の、念仏の祖と音乱名号大念仏と、且中絶し、二百五十年の徒然草と、以法會九日、十五日、東山智積院の僧徒、訓讀會と、遺教と訓読と、以教の釈迦遺教の經、故に遺教經、雪の果、九毎年涅槃の雪降る、故に世倍雪の終、涅槃と、是なり。

三月 榆柳の火

か部表食の条に出る

油花のト

四経 洛陽に巳の日、婦女薺の花を以て油を点して祝して、水上に洒ぐ。若竜鳳

夢見草

櫻の異名、蔵玉、植むと

櫻桃花

花彙、關通志云、櫻桃の木大さくもの、丈も近し、春

花は形止湯子似、白花紅暈最繁密、く枝も満つ、其葉円尖う、椶櫚の如く、頗狭小、細き齒及び小毛あり

実とひとぶ一、枝數十顆、大サ脆、櫻桃の如く、夏月、行春

兼三春物目刺

和漢三才圖會、竹串と以て、贈、鱈魚の目、貫と相懸、曝し乾く、穀子作る、勢州菜名、喜ら製之、めいり

抑、早春、芽のまゝ、出んとす、抑、大子、抑、とり、柳とま、人あきと、別種とす、三月、めかり

時、か部、蛙のめ、正月、供御藥、菓子、屠蘇、白散、度、障敷

○元日、三ノ日、平旦、供之、天皇、清涼殿の東、箱に出、御あつ、御齒固の御膳と供、次、一献と供、御酒と愛、御茶と入、屠蘇、前、分、菓子、嘗、む、帝、奉、ら、し、次、二献と供、則、自、散、事、終、三献を供、此、度、度、障敷、入、御酒、入、奉、ら、し、其、儀、式、江、次、屠、蘇、菓子、ハ、御生氣の、歳、童女の、嫁、者、求、り、三朝、部元、忌、一、点、加、戸、作、是、本、朝、之、故、ま、

春、め、み



三物の連歌、三物の俳諧、三物賣

紀事云 羽連哥

俳諧のく席とて、九京師あつて、連歌の長、是の花の下  
 と号ス又宗匠と云、毎年今朝其一家中其事を玩ぶ、及び子  
 其宗匠家ヲ集り、各連哥を乞ふ、其才一分を奪ふといふ  
 才二分を賜ふと称す、才三分を奪ふと云、近くは三分を  
 三つ物と称す、今朝其事を作らば隨分、詞賦、文章、書、  
 市中賣る、近世俳諧亦然、高き、連哥俳諧の三つ物  
 と呼ぶ、街衢、水祝、旧冬新、夫妻、酒、男、水と  
 と往來す、水祝、祝、朋友相催、酒肴を携  
 其家に至り、水を祝ひあひ、箕面の富、七日今夜諸  
 人、持、加、箕  
 面山の舟、天、競ひ來り、堂上、富とて、光、天、女の前、大  
 櫃三箇と置、一才二才三と称す、櫃の上、小孔を穿、  
 今夕、寺僧、數十枚の木札と積、おと、恭、詣、の人、寺僧とて、已  
 が名と札の上、記、し、め、穴、より、櫃の内、入、或、一、枚、或、三、枚  
 其、意、も、各、三、の、櫃、納、了、く、大、運、轉、し、後、寺、僧、長、き  
 鐘、と、以、く、穴、より、突、き、名、も、も、の、ハ、と、富、と、得、る、こ、と

札の次、御新

十五日公事根源、是八百官悉く、新と奉

喜式、御新

十五日、延喜式、神名帳、駿

三保祭

河内、豊原郡、御徳神社

云、慶長年中より有度郡に属す、羽車磯田の社、本社と云  
 ること、南へ六丁余外濱の海岸に在り、此社、古くは、数、十、町、と  
 云、海中三四丁なる島の島ありし、往年、在、島、衝突  
 し、漸く汀渚と没し、是より、社地と退く、只今、岬と  
 羽衣の旧跡と云、附会之事、風土記に、羽車磯田の社、  
 御徳大明神の離宮なり、今に至り、毎年祭祀の時、本社  
 の神鈴を神幸し、羽車の社あり、神祭なり、神供あり、献  
 ○羽衣のこと、往昔この島へ天女天降、故に羽車と云ふこと  
 神主の家、傳ひ置し、志、身、羽衣の旧跡、今の社地、  
 明ら、例祭正月十五日、十四日、十六日、三日、祭、詣  
 の人、昔も馬とて、多、幸、來、る、十四日、簡、密、の  
 神事、十五日、神前、於、く、天下、太平、の、祈、禱、あり、十六日、古、來、ハ  
 神輿、神幸し、湯立、あり、大永二年、細川、彈正、忠、孝、範、の  
 矢火、く、神殿、諸、宇、神、器、悉、く、燒、失、今、ハ、神、供、神、酒、の



祭祀のいし、**水入菜** 洛の近郊畦の間、水と貯へて、  
社説、養子と水入菜と号す、莖葉甚

蒸く味美、**未関紅** 梅の一種、色紅り、八重、  
洛の野珠、花大く、時紅く、

故、**兼三春物 水ぬるむ** 春陽を打へ、水、  
名、

**葉苜** 二月苗と生、一本叢生、莖梢三葉と附く、  
今江戸の市中、齋くこの自然生、処、非、

中人の作り設る故、**二月水間祭** 上、午日、泉、初、府志、  
中冬の頃、頃、水間寺、縁起、

竜谷山水間寺ハ、聖武帝の勅額、依、行基僧正、天平年、  
中、開闢、也、本尊正觀音、行基四十二歳、

作、二月初の午日を以、会日とす、相傳ふ、以、日、歩、運、  
との、八十二歳の厄難を消除、且、福壽を得、

當日、赤詰の、人土産、草、薺、を、求、  
部、二月堂、**水口祭** 大、部、苗、代、  
行の、条、出、**三月己日枝** 林、

外傳、三月桃花水之時、鄭國之俗、三月上巳、於、溱、洧、兩水之上、

執、蘭、招、魂、續、魄、赦、除、不、祥、朗、誦、源、起、周、年、思、魏、  
也、巳、日、の、枝、ハ、周、の、世、起、魏、の、世、ト、三、日、ト、用、と、云、  
邦、也、と、早、く、の、と、す、部、須、**御酒古草** 蔵、玉、の、  
テ、の、御、枝、の、条、併、せ、

御酒古草ハ、三月三日内裡、御酒入ら、桃、  
代草、桃の異名、西王母の園、三十年、一度、花、咲、この、桃、  
春、あ、い、**水尾祭** 九、日、神、社、啓、蒙、水、尾、神、社、丹、波、國、素、  
田、郡、愛、宕、山、の、傍、に、祭、所、の、神、一、座、

清和天皇、**雜、抄、**帝の御忌の日と用、す、三月九日、祭、  
祭、未、詳、御、忌、ハ、元、慶、四、年、十、二、月、四、日、あり、

生念仏、十四日、北、四、日、追、**雍、州、府、志、**心、淨、光、院、生、生、力、故、  
三井寺と字す、本尊地藏、傍、鑑、真、の、像、と、真、言、  
あ、南、都、の、招、提、寺、ハ、偏、又、開、基、一、身、中、興、一、条、院、  
曆、年、中、快、賢、僧、都、後、伏、見、院、**安、年、中、**因、覺、上、人、此、寺、  
住、始、融、通、念、仏、を、修、今、於、三、月、十、四、日、九、四、日、











の年勞と奏し、位  
と次第を叙す、十四日年越  
紀事今夜俗十四日年  
越と称し相祝ふ

上元日  
花燈の夕正月十五日と上元といひ七月十五日と  
申元といひ十月十五日と下元といひ、花燈の夕ハ  
唐の世に上元の夜燈燭と列後游観すといふ、五雜俎  
天下の上元灯燭の盛あること、閩中ふまるとの事、

子頭の神事  
十六日伊勢國渡合郡山田郷に祭るとり  
七社或八社牛頭の社、大社、木町、藤の社  
太神宮、今村の社、高神、坂の社、坂の社、高倉山の社、其曲の社、是  
御山内、七社、瀬木の社、以上八社、社々各の獅子頭と合せり、  
此内一頭虚空より降りて、残り七ツハ常政長官と云神職  
の作と云祭の日ハ夕所の町に氏子、竟の如く長き獅子と出り、  
松明とともし舞之、土人傳、天人皇百五代後柏原院、永正の末  
飢饉疫癘を平ししこと、獅子頭と作り山田上の在家より、次  
才下町の町へ追やりしこと、其頭と町への疫神を祝祭りて、  
産湯神と崇む毎年五月中旬社より取出りて、鼓吹し、  
舞あり、氏子の家々、くまるとのとして、鏡餅松明、或ハ十二  
灯ありと出り、十五日終夜廻りて、十六日小田橋の上より、刀を

持て、悪神を切拂ふ体とあり、即座に獅子頭と舞衣あり  
押つて其社へ納め入る、十五日より十七日までと云る人  
あり、月令是月也、天氣下降、地氣  
下崩、上騰、天地和同、草木萌動、  
春、春魚、鱸、鱒、魚、王、餘、魚、銀、魚、和、漢、三  
は、部、万、春、樂、也、白、魚、  
の条に出す、  
初、出、人、を、賞、す、二、三、月、腹、子、あ、り、味、稍、劣、き、り、生、こ  
青色と帯水と離るる、白く煮る、白く、潔白あり、下畧  
兼三春物、  
あ、り、玉、姫、  
秘藏抄霞、  
陪書、刻、珠、が、交、  
規、と、嘗、む、味、  
扁螺と云、文字集畧、  
規、貝、蛤、  
似て小し、黒色、字、又、頸、子、作、り、  
檀、柳、  
本草一名世線柳、  
按、小、羅、願、亦、雅、翼、  
云、天、の、雨、ふ、り、と、す、種、ま、づ、こ、を、知、り、氣、を、起、こ、し、以、て、應、  
又、霜、雪、を、負、て、潤、ま、す、及、び、木、の、聖、ま、る、と、の、故、字、聖、  
从、ふ、又、雨、師、と、名、く、或、ハ、日、雨、と、得、る、こ、も、ハ、聖、と、  
幹、弱、く、枝、を、と、持、む、生、下、易、く、赤、皮、細、葉、緑、の、如、  
品川海苔、  
の部、海苔、  
白藻、  
本草、竜鬚菜、東南海中  
の石上生ず、叢生して、菰葉

春  
し



あ、杖ち抑眼の如し、鬚長をその  
尺余、白色、醋と以て浸し、  
**二月 常樂會** 十五

拾遺記 二月十五日、南都興福寺常樂會、  
閻浮檀金の釈迦像あり、その扉面、  
涅槃像を相傳ふ、金  
匠が画く、  
波羅密、  
涅槃會、  
常樂會、  
同く、  
揚、  
四天王寺、  
以下

涅槃會と、  
**積塔** 十六日 紀事 二月十六日、盲人、  
常樂會と、  
衆分、  
至、  
道、  
各京、  
高倉、  
綾、  
小路、  
清聚庵、  
ふらふら、  
光孝天皇の皇子、  
雨夜の御子の為、  
積塔  
會と修す、  
宿忌の頭人、  
大檢校、  
經管と設く、  
座、  
止、  
守、  
替、  
神の画  
像と置、  
衆、  
盲、  
と拜、  
其、  
後、  
大瓶の酒とく、  
盲人六派  
の中の四人、  
平家と説、  
守、  
替、  
神、  
八日、  
吉、  
北、  
社の中、  
社と取、  
祭、  
之、  
俗、  
守、  
替、  
神と誤、  
病、  
神と稱、  
以、  
画、  
幅、  
常、  
檢、  
檢、  
校の宅、  
安置、  
其、  
人、  
死、  
す、  
身、  
六、  
次、  
の、  
檢、  
校、  
五、  
奪、  
盲、  
人、  
琵琶、  
と、  
彈、  
す、  
故、  
小、  
妙、  
音、  
才、  
天、  
と、  
崇、  
む、  
云、  
盲人、  
平家、  
を、  
談、  
す、  
故、  
生、  
仙、  
と、  
ま、  
の、  
畧、  
相、  
傳、  
ふ、  
雨、  
夜、  
の、  
皇、  
子、  
盲、  
り、  
我、  
盲、  
心、  
經、  
と、  
誦、  
琵琶、  
と、  
彈、  
り、  
て、  
宿、  
忌、  
と、  
修、  
す、  
○

千梅曰、  
雨、  
夜、  
の、  
皇、  
子、  
薨、  
し、  
後、  
譜、  
の、  
座、  
頭、  
墓、  
毎、  
年、  
石、  
と、  
積、  
り、  
吊、  
り、  
祀、  
り、  
遺、  
風、  
と、  
す、  
**聖靈會**  
寺、  
日、  
揚、  
劔、  
東、  
生、  
郡、  
四、  
天、  
王、  
寺、  
聖、  
靈、  
會、  
と、  
聖、  
德、  
太、  
子、  
の、  
尊、  
輦、  
を、  
聖、  
靈、  
院、  
へ、  
六、  
時、  
堂、  
よ、  
つ、  
つ、  
の、  
會、  
式、  
紀、  
事、  
二、  
月、  
廿、  
二、  
日、  
太、  
子、  
像、  
并、  
舍、  
利、  
堂、  
の、  
西、  
興、  
と、  
移、  
し、  
六、  
時、  
堂、  
を、  
安、  
置、  
し、  
一、  
舍、  
利、  
二、  
舍、  
利、  
の、  
十、  
二、  
坊、  
の、  
僧、  
徒、  
と、  
合、  
せ、  
堂、  
前、  
の、  
舞、  
臺、  
を、  
於、  
て、  
大、  
法、  
事、  
を、  
あ、  
そ、  
寺、  
中、  
に、  
應、  
と、  
一、  
舍、  
利、  
と、  
ひ、  
か、  
二、  
と、  
二、  
の、  
舍、  
利、  
と、  
是、  
舍、  
利、  
の、  
預、  
り、  
て、  
當、  
寺、  
年、  
の、  
法、  
會、  
の中、  
この、  
會、  
と、  
以、  
て、  
一、  
つ、  
つ、  
と、  
遍、  
時、  
宗、  
踊、  
念、  
仏、  
彼、  
岸、  
の、  
五、  
条、  
の、  
西、  
御、  
影、  
堂、  
を、  
修、  
す、  
遍、  
上人、  
才、  
三、  
西、  
應、  
阿、  
自、  
作、  
の、  
跡、  
院、  
の、  
像、  
と、  
本、  
尊、  
と、  
人、  
毎、  
年、  
二、  
季、  
の、  
彼、  
岸、  
中、  
に、  
り、  
念、  
仏、  
及、  
中、  
世、  
以、  
來、  
尼、  
と、  
勢、  
へ、  
寺、  
中、  
に、  
扇、  
と、  
製、  
す、  
一、  
つ、  
つ、  
と、  
四、  
方、  
に、  
當、  
り、  
世、  
御、  
影、  
堂、  
と、  
稱、  
す、  
是、  
也、  
寺、  
長、  
新、  
善、  
光、  
社、  
日、  
土、  
地、  
主、  
神、  
也、  
按、  
今、  
立、  
春、  
の、  
後、  
五、  
の、  
戌、  
日、  
と、  
春、  
社、  
と、  
社、  
日、  
立、  
秋、  
の、  
後、  
五、  
の、  
戌、  
日、  
と、  
秋、  
社、  
と、  
社、  
と、  
主、  
神、  
と、  
句、  
芒、  
と、  
社、  
日、  
二、  
月、  
之、  
節、  
擇、  
元、  
日、  
餘、  
民、  
社、  
郡、  
委、  
日、  
社、  
綴、  
と、  
祭、  
ち、  
と、  
春、  
事、  
興、  
る、  
故、  
祀、  
之、  
農、  
神、  
と、  
祈、  
る、  
元、  
日、  
と、  
春、  
分、  
の、  
前、  
後、  
に、  
近、  
る、  
戌、  
日、  
**社翁兩** 提要録 社、  
公、  
社、  
母、  
田、  
水、  
と、  
食、  
大、  
と、  
云、  
元、  
日、  
也、  
故、  
社、  
日、  
兩、  
あり、  
と、  
社、  
翁、  
兩、  
云、  
春



















祖神等の人中天上の冥官冥我集会一切の善惡と注す  
 天尊降と八神の教勅三巻勅帳を持ち三復八校して  
 天尊獻す天尊覽了て善と證す惡と證す天印と指し悪帳  
 と證すと爲す傳印と指す中善と證すと爲す非空非  
 傳の印と指す彼入神帝我閻王天大將軍天一行役司兼司祿  
 俱生神の間彼天尊河の中あつて二月と以て天を降り正天  
 地の神と召す吾曰阿迦尼吒天自在尊の所居宮殿の高樹  
 あり天生樹と名く形の須眉の如し春車とゆへ七日をこ敬る  
 七葉七色青黄赤白黒紫翠も秋葉と指す七日をこ落つ葉七  
 色上の如し花の開くとこ中陽院に移り落葉と見て本宮の  
 還り定て知る法余道理然らむ所也彼岸功徳成就經疾く仏  
 道と成るハ當ま三月十八日七月七日晝夜同時一切の諸仏三  
 世の諸尊及父母數千萬億菩薩說法衆生みけて衆と与ふ  
 金剛疏生死此岸と濕槃彼岸と煩惱の中流と居り春八引  
 節船若の一心三觀をて生死の岸の煩惱の中流と居り濕槃の  
 彼岸に到る也 聖門和尙傳記の時正彼岸の中日と云中日八年  
 中の晝夜少くも長短あり 比良八講 北四日八講の式祇園  
 園と故時の正ると以てま

犯事 江島比良大明神社古今日比叡山の衆徒法花八講と修す  
 今に至る比良の八講と稱す此日湖上多く風烈故船急事多  
 ろでハ引鶴引鴨 老鼠湖十日引八帰を雀鳴のるる  
 出さず 冬より春まで多く集り居り春八引  
 むくも〇猿猿襲引鳥の中交るや田螺取支流この引鳥  
 とともめたる意半時庵其外すもつて説くは三月の  
 部引残る雀とあり 一重櫻 一重櫻ハ春分の後花とゆへ  
 合やく考へる也 彼岸櫻 彼岸櫻ハ十日引運ハ又八重  
 櫻先らと十日引を在るの寒温より運速と云ハ九櫻  
 ハ一重と以て本と云故ふも櫻と云稱するハ一重のことあり  
 彼岸櫻 小白草葉春分の後彼岸  
 開る余の花先ら二名小櫻 三月 雛遊  
 雛祭 雛飾 犯事 三月三日良辰の兒女紙偶人製して走  
 立雛 雛と称し玩之ハ元贖物の義あり 枝具  
 及ぶ〇古ハ女見の心遊ハ三月ふるがごとく源氏物語  
 今三月三日これと祭を遊ぶハ全上巳の後の  
 贖物の人形より 姫挑 堀川次郎百首 春霞たのむことあり  
 移るはと云ハ 道久のむらさきと云ハ 雛と云ハ花

春 記



緋桃

緋桃 ○緋桃、八重み、深紅なるもの、天和本草拾遺

比良祭

十五日○江加比良村の祭、神輿二基、山王十禪師、飛梅天神の西社、十禪師、南比良村の鎮守、天神、北比良村の鎮守、西神の社、此二村、南北十余町に亘る、南比良村の鎮守、八幡、北比良村の鎮守、十禪師、天神と合せ、兩村三社の神輿二基、同月同日祭之と、比良祭と稱す、此辺古、一円、山門の領分、故、多く山王と崇祭、

人齋忌

十八日○古、官家御影供と修す、今、おひし、和寺と好む人多く、この日、奇会と修す、南都按本寺の塔を、或、和州初瀬の近辺、此の所、哥塚、是人丸の墳墓と、洛西鳴滝の妙光寺、人丸堂あり、木像ハ傳へ、俊頼の作る処と、又、播磨明石より、人丸の御影供と修す、右大倉谷に社あり、人丸、後馬の地、石見國に、神祠ハ、高角の山上より、廿、高津と稱す、この祭、祀中絶、御影供の義、外、靈元帝の御宇、及、勅、絶、絶、絶、引、残る、廢、と、奉、杖一位を授け、

鶴

二月の部引雀の処に記す如く、二月引雀、雀の三月、引のころ、たると、

正月

餅鏡

は部、齒固の茶、此、

兼三春物百十鳥

八雲御抄、

鳥千鳥者、雖來、君曾不來、座、古今、百十鳥、春、の、あ、れ、れ、我、を、う、ゆ、

〇鶯のこゝろ、説、海雲、俗、海雲の二字を用ふ、狀、乱、縁の如く、色、青く、黒く、柔、滑り、長、数、尺、石、上、生、つ、て、水、上、に、浮、ぶ、是、と、い、ふ、子、も、滑、り、得、

是、と、い、ふ、子、も、滑、り、得、

易、鳴、た、泉、州、岸、和、田、及、び、對、州、の、産、肥、太、く、佳、と、す、薑、醋、和、

二月 鮭花煎

十五日○京師の俗、正月用、の、餘、花、と、貯、置、く、二、月、泥、聚、會、煎、供、物、と、す、又、正、月、の、餘、と、あ、り、の、如、く、前、日、と、用、ふ、是、と、鮭、花、煎、

諸子魚

あり、美、魚、其、味、脂、多、湖、水、産、品、の、内、江、西、坂、本、も、モ、ロ、川、と、も、此、魚、を、多、し、故、名、と、す、大、和、本、草、三、西、州、も、モ、ロ、川、に、あり、油、身、魚、と、も、記、す、ア、ラ、ハ、其、鱗、鮓、の、尾、に、似、く、鮓、魚、と、も、大、七、八、寸、其、味、甚、佳、品、也、是、モ、ロ、川、の、大、二、異、大、和、本、草、の、説、も、又、モ、ロ、川、の、黃、鯛、魚、と、も、記、す、是、と、い、ふ、



黃鯛魚ハ... 江州の俗ロカカト云大... 是も湖水... 甚多トモロハ三寸ニミバ大小あり又柳... 活法... 三月挑

の酒 蘇頌壽經 太清本草云酒挑花と漬... 百病と除... 顔色と益又王金方三月三日挑花一斗外...

み部 桃花 事類賦 其花或ハ仙と成て壽と益ト或ハ鬼と制... 報ト云和漢三才圖會或書云伊弉諾尊桃子三箇と採て火...

○絳挑、緋挑、碧挑、金銀挑、源平挑、江戸挑、早挑、冬挑、一歳挑、毛挑、雌挑、西玉母、油挑、日月挑、三十世草、...

木蓮花 天和本草 國俗、紫多くと木蓮花と云... 花の色悪く、白くと白木蓮と云白花と...

正月

井花水 紀事 大和國窪田畷... 尾の雨村二十壽万歳

十壽万歳 紀事 大和國窪田畷... 尾の雨村二十壽万歳

煎餅と繫 下部 天穿... 節振

舞節小袖 紀事 京師の俗、元日と節日に至るまで親... 朝節 戚朋友互ニ酒食と設け饗應ス是と

生菜 右部 春盤... 准て知、朝夕ハ饗應の時刻と云

兼三春物 芥 本朝食鑑 源順曰水芥、三水英、水早及...

ハ平地に生じて根少く、赤芥ハ味悪くして用ひず、白芥ハ味長小... 常用す、忽々の波沢田川に多く生ず、或ハ水田水圃に生ず...



二月生子と献す 季必傳二月朔日民間  
音養といふ百穀瓜果

白花と開く の種と盛り相問の遺く号し生子と献す間里宜春酒  
を醸し句名神と祭り豊年と祈る百官農書と進み以て本と  
發むると示す今も著しく  
上巳と九日と三令節と今  
釋奠 上丁日公事根源是八年の二  
度二月と八月とありて日融

国忌初年祭 武天皇  
統皇紀文武天皇  
太宝元年二月丁巳始て教奠を行ふ礼記王制菜と穀と幣と奠  
と先師と礼スく各々大学寮を行ふ孔子及び子哲  
の影と祀る上卿ハ必納言文章博士孝短礼記毛詩尚書論語周易

左傳年廻 浅間祭 廿二日駿州阿部郡浅間の祀し年中  
の祭祀朝参と摸一々八十三度あり今ハ  
名目の存るも二月廿二日の祭礼ハ今に至る嚴重之府中  
檢町ハ狂言使物ホと出此日社の外ホと兼と高ふ近郷のもの必ス  
買之の麻文日今式浅間祭と浅間祭とて信州ホと信別浅  
間の別當尋ふ二月祭り四月始て山の口をと採りて  
諸人參詣スハ今式信 藤領畠経 狗脊苗火と知  
判と記せら誤り

其莖葉貝殻似しく細く其色黒 三月青精飯 小部寒  
長三す收多し狗の脊骨の如し  
山ハ一種ハ西王母の園三千年ハ花咲きハ桃  
西王母 桃の一種ハ西王母の園三千年ハ花咲きハ桃  
ハ八重ハ大なる義

寺開山忌 洛の東山ホ在中興の開山俊苾忌と修すハ秋書  
原氏生て数日樹下ホ棄つ三日と短く會歎の害ハ阿弥住  
祥見しす抱き帰て母ニ付十八ハハ落飾建久二年

四月入来 五月の初来の江陰軍着建曆改元年帰朝嘉禄元  
年十月某の日泉涌寺ホハ直開講堂と建く明年の春華構  
落成嘉禄三年閏三月七日右脇して遊ス  
年六十二ハ法会ハ八日或ハ九日修まると  
善道守忌 丁酉〇唐  
の終南山

悟真光明善導大師の忌日 隋の煬帝太業九年癸酉生唐の  
高宗永隆二年三月十四日遷化春秋六十九歳本邦東山禪林寺水  
觀堂智恩院中の善導院小松谷  
千本念仏 未蓮通の北  
の長舟運の

南引接寺の閣下堂 在紀事是も又融通念仏の余流毎  
堂前の普賢像の揚花と期と寺僧一技と折て諸司

堂前の普賢像の揚花と期と寺僧一技と折て諸司



代献、則米三五斗と云、此、七ヶ日念仏の料と云一説、此法事  
 八元刑人の為、これと修、故、諸司代、施米を、是、追、為、の、為  
 こと、の、開基定覚上人、鐘の銘、顕然、定覚の、遺教  
 径の条、此、此、千本と云、八、筐の、窟の、日、藏上人、冥土、至、約  
 千、こと、を、其、為、千本の、卒都婆、舟、里、山、  
 立、供養、を、修す、此、舟、里、依、て、名、  
 今、州、花、肆、ふ、お、もの、花、八、黄、豆、の、花、の、如、く、葉  
 ハ、野、萩、に、似、て、や、り、こ、本、草、菜、蔬、に、載、る、昔、昔、に、似、り、但、  
 な、り、ハ、滑、菜、の、類、に、似、り、  
 夏、秋、花、と、し、ら、る、ま、の、異、  
 正月 住吉の御弓

仙臺萩  
梅

犯事追加 正月十三日住吉の御弓、其式社人正鶴、准、一、尺、三寸の  
 的と立、立、合、を、射、勝負、を、論、す、ふ、あ、手、神、事、と、云、  
 今日、恭、詣、の、諸、人、竹、馬、と、昆、布、と、買、て、土、産、と、云、  
 又、坂、の、魚、屋、煎、餅、と、名、物、も、各、これ、と、買、ふ、  
 鈴子さ

兼三春物  
測蛤

す 兼三春物 測蛤  
 拾、其、肉、と、升、盛、り、て、市、を、醋、和、り、て、是、と、脛、と、す、  
 故、測、蛤、共、醋、蛤、と、も、云、移、り、大、坂、の、至、人、專、ら、正、月、賞、し、て、食、之、  
 雄子の異名、秘蔵、  
 雄子の鳥、と、云、く、大、坂、と、云、り、り、  
 二月

すがね鳥

雄子の異名、秘蔵、  
 雄子の鳥、と、云、く、大、坂、と、云、り、り、

二月

杉菜

天和、春、月、先、花、と、生、幸、の、如、く、嫩、を、時、味、之、下、  
 別、草、葉、と、生、枝、菜、と、名、杉、に、似、り、濃、名、の、評、あり、  
 一、説、春、の、野、の、焼、く、跡、生、る、墨、黒、の、畧、と、云、  
 黠、悪、の、薄、も、い、り、頭、胎、末、黒、の、畧、と、云、  
 雀

末黒薄

黠、悪、の、薄、も、い、り、頭、胎、末、黒、の、畧、と、云、  
 雀

の子

は、部、孕、雀  
 三月 須六の御枝  
 源氏物語、  
 の、つ、と、ら、ふ、た、ま、を、

巴の目、は、ま、る、り、し、大、海、の、原、へ、ま、る、り、と、い、ふ、こ、ろ、を、物、の、形、と、す、  
 ○是、ハ、源、氏、須、六、へ、左、辻、の、時、三、月、の、朔、日、巴、の、日、を、浦、辺、を、舟、入、形  
 と、立、ま、い、て、扱、の、具、と、り、扱、除、す、  
 事物、異、名、三、月、花、と、云、  
 葉、五、出、白、色、和、漢、三、才、番

李花

葉、五、出、白、色、和、漢、三、才、番

蕪枋の花

宗、藍、曰、香、紫、花、と、い、ふ、甚、  
 細、碎、と、云、  
 葉、五、出、白、色、和、漢、三、才、番

全、形、を、桃、に、似、て、味、酸、と、す、  
 帯、と、故、と、酸、桃、と、稱、す、  
 葉、五、出、白、色、和、漢、三、才、番  
 葉、五、出、白、色、和、漢、三、才、番  
 三、才、番、全、條、蕪、枋、の、木、あり、樹、皮、濃、く、白、く、葉、薄、く、光、あり、但、  
 葉、並、長、三、月、花、あり、淡、紫、横、生、で、大、さ、麥、粒、を、り、花、と、倍、  
 狀、藤、の、子、に、似、て、小、く、中、子、細、く、子、を、春、子、と、稱、す、  
 然、る、も、

春 す 追 け



草木と云ふ故其汁物と染るる否やと云ふ雑談抄和  
 国に生ずる紫荊花は紫色と染るるは藤材此の如生ず  
 ることと云ふも人排諧ふ **董** 藤菜曰董菜ハ野に生ずる人の種  
 りて地多く紫荊花も人 **董** 地多し董菜ハ野に生ずる人の種  
 紫和名抄董菜和名須美礼 **天和本** 京都にて相撲取と  
 云筑紫にて殿の馬と云小兒其花ニ鑑みり地は西花相交へお  
 けし引く戯し相撲の形に似たり部にて相撲取と云草ハ別  
 る若水曰紫花地丁別号董と菜と云故に國俗董菜とす  
 みまし誤り稱す董菜別云  
 ○董董、つ部注せり

**追加** **は** **正月** **初鳥** 初鳥三ツ思うハ **初**  
 千五百番哥合今朝よりハ雪げの雲のお

**空** 初空や鳥とのせ **初風** 虚栗 初ふきゆらけ  
 初空や鳥とのせ **初風** 虚栗 初ふきゆらけ  
 牛の鞍 嵐雪 初風 虚栗 初ふきゆらけ  
 の鳴の空せ掛 塔山 花

**の春** 花の咲春と云義ありの誰人の薦 **兼三春**  
 着こいまを花の春 芭蕉

**物春風** 灸の点ゆめよと寒 **春の草** いろくの  
 春の風 許六 春の草 いろくの  
 名もじつじ

**春の海** 松蔭や旭見ふや **春の川** 花  
 春の海 松蔭や旭見ふや **春の川** 花  
 散

**春の水** うつくしう鯉うき **春の野** 春の野  
 春の水 うつくしう鯉うき **春の野** 春の野  
 や木瓜

**春の日** 春の日の念佛ゆ **春の**  
 春の日 春の日の念佛ゆ **春の**  
 春の

**春の雪** 春の雪 文考  
 春の雪 春の雪 文考  
 春の

**春の山** 月令博物筌 春ハ草木もさう **春の**  
 春の山 月令博物筌 春ハ草木もさう **春の**  
 春の

**暮** 夜をぞ春の暮重 **二月** **初虹** 月令章句 夫陰陽和  
 暮 夜をぞ春の暮重 **二月** **初虹** 月令章句 夫陰陽和  
 夫陰陽和

**春** 追はほとちりを **春**  
 春 追はほとちりを **春**  
 春

追はほとちりを







皆不正の **よ** 正月 四方の春 春の気色の具り

氣云云 **た** 正月 玉打 きの部 餅の **二月** 余見る處し

**種芋** 種芋や花の盛りと **三月** 鷹の巢 和

三才圖會 鷹窟ふ生むる者ハ好て眠了木ふ巢 **九**

ふ者ハ常ハ立雙ふ人家ハ育る者と巢鷹ハハ **正月** 礼者 礼者ハ **つ** 正月

**鶴の庵丁** 十七日 紀事 舞樂の事と始らむる前六

樂畢て後 雀高盛等の献ハ人群臣まて **あ**

賜ふ云 舞脚覽の条 **二月** 茄子植 夏のふの部 **び** 二月 萍の

**若葉** 夏の追加 葎茂る **く** 正月 食つみ

昔藍云今の俗説云蓬菜葉と食つこと

俳諧者流もまた同物と心得る者多しむ

と唱へし今の重詰のさくひにて賀客饗應のま

ば連句あはれらも食類の差合と縁へし今

ほつあらを夫婦の嵐聖 食つてや山居の味

をえ初 柳屋 食つて蓬菜 同物あらぬ徴 廣徳集

春の部 蓬菜まきつてや伊勢の初 芭蕉云

て此句より 飾り松箱の海老今朝の春ふとる句

五章つらとる後ふ 食つてや木曾の白ひの檜物 公

水云 同物あらんは蓬菜食つこと並 出入

隔てらふてあふべし 但し木曾の白 **や** 正月 宿

ひの檜物ハ其器といふあふべし **の春** 遠近集 羊ふ留守と **二月** 藪蕎

大和本草 林中多き草は芋の葉及び **麦**

葎麻の葉も似たり 缺あり莖ハ圓くして淡 **紅色**

節毎葉三つつき 節毎葉の上ハ一處ハ十餘 **花**

花あつまり 開く花の色淡紫 小児花と咬ふ **二月**

春 追くのま



花ひ **三月** 柳太刀 昔監云此詞諸抄不載せども

太刀云義未詳但し諸抄の例ふらば桃の節の  
雛柳髪と次序まよきと柳髪と省さく此詞の替  
り、按むらふ諸抄不載も柳髪やの部と省さく更  
ふ柳太刀と出まき道理もまよふ全、柳髪の意  
誤らまよふし、まよふ省くべきと爰不費して辨  
まれば人の惑ひと解ん例の老渡心なり

**正月** 窓の春 あつくし鳥 萬歳 日五

禁裡へ来ると千壽万歳と入せの部注も〇一  
条院の御宇大江の定基三河守不任じ其民不佛教  
傳來の因縁と教へて舞舞じ、**町汁** 十日汁 **紀度**  
こと三河万歳の始りとも  
洛下の旧俗今朝毎ふらぐら膳食と會所不携の十日  
此月頭人汁と設くらんと汁會と称も契し畢畢  
法令と讀て教ふ町中の男女 **舞御覽** 十七日  
此式と守る五月九月同然云

**紀事** 清涼殿東の小庭に舞衆あり 松菜 **菘菜** 菘菜  
鶴の庵下此時に追加のつの部と入し 菘菜  
一名菘蓬水傍下湿の地不生ぞ菘菜菘菜似て亦線標  
あり葉蓬似て肥壯蓬葉不比之れ亦稀疎莖葉の間  
ふ音子と結入極めて細小 畧 苗葉と採採燥燥熟熟水  
小浸し鹹味と入入淘洗淨り油益益調調此詞四季部  
類類入

**ふ** **二月** 路のちうとあ 落の姑  
えり 芽の長  
少し薑の立立のちうとあとあ 天子集 **三月** 蒲  
中中より路のちうとあとあ 道織

**菊花** 秋の部 **こ** **正月** こふびき祝祝  
ふ注注

昔監云増山の井若菜条条云昔ハ若菜と上の子の  
日小内藏察並内膳司より禁中中奉奉ままりり或ハ  
十二種供供ままりりありしし一一公事根源不侍り今今と  
在家七日日福福ままりりとと祝祝ひ侍侍云云今今ハ  
在家在家のの文意とめて按按むむ四季部類類公事  
の部部糝糝七種七種のあつあつの奉奉ままりり注注一一誤誤

春 追ままりりここてて



此事公事根源及び後水尾院年中行事亦も之を  
且又糝とせり、當季隨ふて祝ふの詞とて可ま

らんとす、草の七日のこまけと出せり、和訓栞

き、倭名抄録とせり、又糝とせり、字書曰糝ハ以米和

火也、つひ、糝糝とて、粉菜糝雜るの義、米粉とて

菜、美と和とあり、云々、今、の菜粥の事、

**三月 小櫻** 花うす色密して咲鐘の小櫻成と云、物此花の色小くともあり、○小櫻の

花さく雨や具 **正月 毬** 手まり奇年の

足親 重寛 **正月 毬** 秋の部後

むすめ小幼女の詠ひと蓋 **三月 出替** の出替の

毬打ふあらつとあり、 **正月 三ヶ日** 玉海集書初の真行

糸ふ **里居** 敷入と里居ともいふ、三の旬小里居ぬ、或も

爰不贅と類柑子星合と中 **二月 佐保姫鷹**

の七日の里居ぬ 功徳

と云一説小鷹の雛といふ云 **三月 ぎく茶** 追加の

やくふむかひ **正月 遊行札切** 十六日遊行上

の糸と **正月 御代の春** 題黄金目ふいむ一

諸人化益のため、一扁上人熊野権現より請らまゝ、遊行

代々相傳六字名号の印を正月十一日小押とていへり

る几と札切といふや、東都浅草日輪寺より問をへり

小札切と称する事ありといへり、此詞四季部類不出

**ひ 正月 檠** 草小あつむのふわらば、木の切株

て細き芽を生まると、檠といふと記せり、此説あり、

あらんと思ひ、小新古今曾祢好忠の哥ふ、あら小田

の去年の古根のふる蓬今春へ、ひととをえあたる、是

蓬のひとをえ、然れば草木ともふ、檠の名目あり、

春 追きゆみひりす



三月 緋櫻

小輪より莖長くささぎ甚し亦し  
新撰六帖夕つくり日つくり入雲やほぐ

らん高根ふ立るい  
さくららの花光俊



正月 掩門戸

俗元日

より三日小豆し民間門戸を  
掩ふ心の福神と出るゑ為る



二月 西瓜蒔

注ふ  
不爰

五月 柳の春



増補歳時記禁草春之部終



第〇  
回

金  
子  
の  
事





